

俳句雜誌

令和四年九月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第九号

水明

2022 9月号



水明全国大会

令和四年七月六日

(於ロイヤルパインズホテル浦和)



水明創刊90周年記念
水明通巻1100号記念

祝賀会



主宰と各賞受賞者の皆様

水 明

第1104号

— 華の一句 —

アイスクャンデー画鋏跡ある婆の店

大村節代

七十代から八十代の人にとって、昭和の駄菓子屋は、子供の頃の溜り場であり社交の場であった。大概婆さんが自分の小遣稼ぎのために細々と商っている店であった。夏はアイスクャンデー冬は焼薺が定番であったろうか。作者が住む町内に、代替りして今も健在の婆の店がある。板壁に遺っている画鋏の跡を見て万感胸に迫る思いを抱いた。

(鬼之介・推薦)

水明

令和4年
9月号

華の一句

通ひ人(作品)

山本鬼之介

4 1

まつり(近詠)

山中みどり

6

山陶房(近詠)

由良ゆら女

7

冠木門※主宰作品の鑑賞

境延昭

8

硯箱※季音月評

井口俊晴

10

季音「雪」(同人作品)

栢尾さく子
五明昇
菊池ひろこ
ほか

12

季音「月」(同人作品)

内田恵子
鳥羽和風
井上燈女
ほか

19

季音「花」(同人作品)

近藤徹平
日高道を
大塚茂子
ほか

24

『水明誌』を繙く

中西夕紀

29

現代俳句鑑賞

網野月を

30



全国大会の記

井口俊晴

全国大会 兼題句入選句

37

季音賞作家の頁(私の三句)

井上玲子

正木萬蝶

48

鼓笛賞作家・山紫賞作家の頁(私の三句)

染谷正信

鳥羽和風

50

水明集

篠崎紀子 清水桂子
新井孝磨 ほか

52

水明集作品評

山本鬼之介

64

水琴窟 (水明集七月号鑑賞)

池田雅夫

68

山紫集

70

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

76

俳誌望見

梅澤佐江

79

句集喝采

近藤徹平

80

水明の記事他誌転載

82

水明夏行

青木鶴城・石井喜恵

84

水明例会報・各地句会報

86

りんどう忌・水明塾のお知らせ

94

風声・発展基金御礼

95

後記

98

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

通ひ人

山本鬼之介

折鶴の羽に入魂秋立つ日

中庭の空をあふるる天の川

初に見る隣家の佳人むくげ垣

少将といへば「深草」秋螢

秋扇や婆の口ぐせ「好男子」

鈴虫に留守居を頼む独り者

地方紙にくるまれきたるラ・フランス

名苑の殿方用やつつくし

まつり
山中みどり

担 ぎ 手 の 先 棒 争 ひ 夏 祭
お 囃 し の 屋 台 揃 ひ の 紹 伴 天
白 虎 青 龍 四 神 の 護 る 大 神 輿
金 色 の 鳳 凰 挿 む 稲 の 束
担 れ て こ そ の 神 輿 や 疫 祓 ひ
神 輿 締 め 金 と 浅 黄 の 太 き 綱
夏 雲 を 映 し 滔 々 の す み だ 川

まつり
墨堤向嶋の牛嶋神社は北齋の須佐之男命疫病退散図を掲げ、氏子町会五十余を有する神社である。五年に一度の大祭も来年に順延と決った。仕方の無い事ではあるが江戸っ子気質の祭り好きにとつては恨めしい話ではある。私の住む本所一丁目には姿と大きさを一、二といわれる大神輿を誇りとしている。昨年祭が中止となった時は町内千世帯に大きな梨を一つずつ配った。「お祭りはナシですが、幸せのアリの実をどうぞ！」と、護摩札を添えて。結構好評であったがさて今年はどうするだろう。二番煎じは粋じゃええと言われるだろうから……。

山陶房

由良 ゆら女

伊賀陶土掌にやはらかし秋の雨
秋立つや素陶一筆白化粧
外廁ちよいとご免よ穴まどひ
薪にほふ松のなげきを聴く夜長
盛り塩に祈る火入れや秋の昼
炎守る三日二夜をかまど馬
灰かぶりまづはめでたし温め酒

定年後に始めた事が四つ。内俳句と陶芸をコラボして陶板に作る事が楽しく、この句をこの形、この絵とこの釉でと紗一主宰始め諸先輩の秀句を制作して喜ばれた。その制作に度々通ったのが伊賀の山手の陶房、窯主や土との相性も良かった。伊賀は雨の多い所、単線が不通になり閉じ込められることもあったが、ゆつくり土と遊ばせてもらった。目下数々の抹茶碗や花瓶の断捨離に苦慮している。外出もならず思い出すまに。

冠木門

● 主宰作品の鑑賞

境延昭

六月号

筍を幹竹割りにする女

幹竹割りとは袈裟懸けや撫で斬りなどと同様、人を刀で斬るときにの形容である。幹竹を縦に真直ぐ切り裂くことで料理の教本には馴染みそうにない。余程気性の勝つた女性なのか腹に据えかねる出来事があったか。普段は淑やかな女性、ご亭主との間に我慢の出来ぬ何かがあったに違いない。男は見ぬが肝心、知らぬが肝心。黙って筍に身代わりを委ねるよりない。

到来の秘伝の酒に初鰹

左党の読み手は中七に目が行く。初鰹から察すれば土佐の銘酒、「土佐鶴」か「司牡丹」の様に思う。土佐では山海川の珍味を山盛りにした皿鉢料理が有名だが、中でも鰹のタタキが主役である。擦り下ろした生姜とにんにくの薬味があれば充分である。相伴に預かりたいものである。

山は力を河は情けを愛鳥日

国土面積の七割が山の日本、農耕地はわずか一二％に過ぎ

ない。治山治水はこの国の保全に最優先の課題である。山間僻地の荒廃と年毎に荒れ狂う河川の現実を思わずにはおれない。しかし作者はこんな小理屈は言わない。上五、中七の措辞は鳥は勿論人にも通じるもので格言の様に響く。山と河は日本の詩歌にあるアニミズムの根源である。

新緑に溶くる淑女の乗馬服

淑女、中国最古の詩集で孔子の編と言われる「詩経」に既にあり、善良で徳のある婦人を指す。女性の地位向上が言われるようになって余り耳にしなくなった。女性悉くが名に相應しい徳を得たか、そのような女性が居なくなったのかどちらかであろう。乗馬服は腰までのベスト風の上着と腰から膝まではゆったりして膝下で密着するズボンからなる。映画で見るとナチ親衛隊の制服のズボンを思えばいい。魅力的な景ではあるが果たして淑女かは疑問である。

サンングラス外し男がなほ野暮に

諸譚が痛烈である。実は白内障の手術を終え、防護のため大ぶりのサンングラスを買わされたのだがこの句に出会ってからは到底使う気になれない。街を歩くサンングラスがみな野暮に見えてくる。

七月号

夏帯や紅さす指の板につき

京都の舞妓を詠んだ。舞妓は芸妓見習い中の十五から二十歳の少女でだらりの帯と赤襟の襦袢が特徴である。だらりの帯は五〜六メートルの長さ、成り立ての舞妓は長さ半分の「半だら」を用いるようである。夏帯も半だら、素材や色模様が夏向きのものである。義務教育を終えたばかりの少女が紅皿に溶いた紅を薬指で差している。横の小指もそれなりに様になっている。京の花街に通じた作者、鑑賞するには苦勞する。現地指導に肖りたい。

しつとりと格子戸濡らすさつき雨

前句に続き京都の景と思う。近くに格子戸の家があるが団地の中に一軒だけではこの句の趣きはない。花街というよりは軒を連ねる町屋の風情が目に浮かぶ。間口は狭いが奥に深い町屋に上五「しつとりと」の修辭が似つかわしい。長年の風雨や日差しに耐え抜いた木材の質感、古くから菩提樹の木材が多く使われた様である。

遠雷や反り美しき巫女の舞

読み返す内に単なる情景句とは思えなくなる。広辞苑に因れば巫女は「神に仕え神楽・祈禱を行い、または神意を伺い神託を告げる者」とある。季語「遠雷」の斡旋と中七の具象

的な修辭により、トランス状態で信託を告げるシャマン的なものを感じてしまう。

遠州といへば「石松」 沖膾

遠州は遠江の国、現在の静岡県西部である。其処の森町出身故森の石松と呼ばれる任侠を詠む。森町は秋葉街道の宿場町、山国とまでは言わぬまでも丘陵地である。沖膾の季語に枳然としないでいた。水明創刊九十周年祝賀会の折、主賓の現代俳句協会の中村和弘会長が挨拶の中で広沢虎造の浪曲「清水次郎長伝」を引き見事に説明された。都鳥一家との果し合で斬殺される訳だが、膾を作る際具材を切り刻むところからの言葉の選択である。中村会長ご自身も森町出身のこと、主賓への挨拶句だったのかもしれない。

重畳や地場の鰻と里景色

中村会長が先の句を引かれた際、子供の頃に森町で鰻を獲った話をされた。二句セットかも知れない。しかし場所を特定する必要のない普遍的な詠みである。上五「重畳」が決め手。漢籍にありそうな言葉だが畳に古来する日本独自のものの。広辞苑に因れば、幾重にも重なること、この上もなく満足することの二つ。後者の意、やや上から目線の感がある。高校時代の副読本でこの字を知った記憶がある。その作品や作者については全く思い出せない。

硯箱

◆季音七月

井口俊晴

再起する時か若葉の雨上り

菊池ひろこ

暗く垂れ込めた冬空が遠くに去って、あたりは瑞々しい若葉で満ちあふれている。ついさっきまで若葉を濡らしていた雨も上がって、街は新緑の中で活気を取り戻しつつあるようだ。長く鬱々として楽しまなかつた私だが、まだ雨水を滴らせている街路樹の下に立ち、もう一度頑張ってみようと決心した。若葉は病んだ心に、再起を誓わせる力を持っているものようだ。

深夜便のノイズざらざら五月闇

西山貴美子

夜中に目が覚めた。眠ろうと思ったが、頭が冴えてどうにもいけない。寝ているベッドの周りは、深い闇に包まれている。手探りで枕元のラジオに手を伸ばし、やっとスイッチを入れた。深夜便のアナウンサーが古い歌謡曲の解説をして、昭和のメロデーが流れてくる。ラジオが古いためか、レコ

ードが傷んでいるからか、何だかざらざらした雑音が混じって聞こえる。五月闇の外は雨が降り出したのか、雨戸を叩く音がする。

錦鯉とて夜を睥睨のちからあり

吉住光弥

大きな錦鯉が神社の池を泳いでいる。延喜式に載っているとかいう、社格の高い神社なので、御神木に囲まれた池は大きく、泳いでいる鯉たちも大きい。お参りに来た親子連れが覗き込むと、錦鯉の方も水面上がって来て口を開け、大きな目玉でぎょろりと睨み付ける。まるで世の中を睥睨するかのよう。この錦鯉の風格あふれる姿を詠んだ吉住光弥さんは六月二十六日、満九十八歳で亡くなりました。合掌。

モンブランのインクのブルー風薫る

藤澤喜久

風薫る五月、しばらくご無沙汰していた友人に手紙を書くことにした。銀座に出かけた折、鳩居堂で買い求めたまま、

何か月も抽斗にしまっていた便箋を取り出す。使うのは愛用の万年筆。昔からボールペンは使わない。インクは万年筆に合わせモンブランのブルーブラックに決めている。ちよつと考えてから、さらさら書き始める。そよ風に運ばれるインクの微かな匂ひが心地よい。

ペディキュアの足颯爽と夏来る

丸山マスマ

夏が速足でやって来た。セーターを脱ぎ捨て、青空のようなりネンのブラウスに着替える。そして白いコットンパンツ。パンプスを履くのもうやめた。ほどよく肉付があつて、それでいてほっそりした自慢の美脚には、爪先が見えるサンダル。爪には赤いペディキュア。色白の自慢の肌が、否応なしに強調されるといふものだ。これで渋谷のセンター街を歩いたら、ハチ公も振り返ること請け合ひだ。

鍔鎌砥ぐ砥石のくぼみ麦の秋

川崎道子

麦の秋、これまでよく働いてくれた鎌を、労りの気持ちを含めて研ぐことにした。奮闘努力の跡か、すっかり鍔付いてしまった鎌、砥石に刃を当てると、その部分が窪んでしまつていふ。何度も何度も刃を当てて研いでいるうちに、硬い砥石と言えども、いつの間にか凹んでしまうのだ。それは毎日

の農作業の蓄積を表しているかのようだ。黄金色に実つた麦の穂を撫でるように風が渡つて行く。

背割れて急発進のてんと虫

原田秀子

いろいろな虫がいる世界で、てんとう虫が一番可愛いと思つている。「赤青黄色の衣装をつけた てんとう虫がしゃしゃり出て サンバにあわせて踊りだす……」。二十何年も前のチェリッシュのヒット曲を思い出した。じりじり照り付ける夏の太陽の下、休んでいた葉の上から、何かに驚いたのか、赤い背中をばかつと割つて羽を広げ、急発進して飛び去つて行く。作者の優しい眼がてんとう虫を追っている。

集落と集落つなぐ遠蛙

保坂翔太

山の出湯へ二泊三日の旅に。評判の温泉にゆつくり浸かつて、地酒の晩酌で夕食を楽しむ。気が付くと、あたりはとっぷり日が暮れて、どこからか蛙の鳴く声が出てくる。このあたりの集落は、冗談だろうが、住民より蛙の方が多いと言われるほど過疎化が進んでいる。耳を澄ますと遠くから蛙の声が聞こえてくる。温泉を中心に、山の向こうの方から、また、谷の向こうからも、蛙の鳴く声が聞こえる。まるで集落と集落を結ぶ通信のように。

季音雪



正直な味 栢尾 さく子

巨星墜ちて古木の蟻の固まれる
足早に身を鎧ふかに黒日傘
ギヤマンの菓子器も出され夏茶の湯
浪音を聞く他なくて沖縄忌
正直な梅干の味水甘し

パリ祭 菊池 ひろこ

パリ祭や極彩色にパリ汚れ
パリー祭銀座の家並み低かりき
黒紫は守りか攻めか立葵
井戸端に足音みだれ半夏雨
水温を訊く異邦人梅雨の海

清 夏 五明 昇

ハンカチーフ 椎野 美代子

真つ先に朝陽がくぐる夏越の輪
富士塚を曳かんばかりに蟻の列
抜け井戸に忍びの影か黒毛虫
権禰宜が縁起を語る片蔭り
打水に江戸の風湧く佃島

今日はじまる夫に手渡すハンカチーフ
鳩は翔ち父とハンカチ振る別れ
ハンカチの樹の下ハンカチーフに風
ハンカチーフ甘噛みしてる夜の会話
額田王の袖は紫ハンカチーフ

痒さうに 境 延 昭

祝 酒 島 津 初 花

痒さうに這ふから毛虫嫌はるる
片蔭に昼を商ふキッチンカー
橋よりはむかし色街夏柳
形なき余生のごときシャーベット
弁当包むハンカチーフは森英恵

旅名残行く手に立つや雲の峰
祝ひ日や鏡開きの夏夕べ
峰雲へとどけ恒例三本締め
短夜を平和な国に目覚めけり
カウンター今日のメニューと金魚鉢

打水 鈴木康世

打水の路地の華やぎ神楽坂
打水の奥盛塩の白とがり
手際良く柄杓で水を打つ姫
慈しむいのちのちのありて水撒きす
水撒きて犬を遊ばせる翁

緑 蔭 田寺玲子

ゴンドラで越ゆる国境雲の峰
緑蔭の研師の腕水とばし
緑蔭へ移すテールブルカフェラス
須磨明石土用太郎の波さわぐ
改札を出で青嵐に立ちつくす

夏 袴 十倉和子

渾身の蟬声弾く力石
沙羅落花仏足石を鎮めたり
渴筆の軸の力感夏座敷
清流のおもむき父の夏袴
俠盗の墓石欠くなと青葉木菟

三 界 永野史代

卯波立つわが生涯の激しさよ
茅の輪くぐる姉の後ろにつづきをり
茅の輪くぐる男の子の神妙なる顔よ
咲き継ぎて天へのぼらむ立葵
三界の何処を吹くや青嵐

隠れ宿 西山貴美子

茅の輪くぐり心まどかになりゆくも
川原撫子切れ長の子に捧げけむ
江戸風鈴の風をしばしの隠れ宿
若返りの媚薬じんわり夏の月
鉄風鈴笑ふつもりが泣いてゐる

星涼し 波多野寿子

心地よく川の音聞き髪洗ふ
クツションのビーズキラリと星涼し
思ひ出は彼方にあそぶ夏の雲
もう逢へぬ友幾たりか沙羅の花
庭の木々あやしく揺れて夕立来る

どぜう鍋 星野和葉

とぐろ巻く怠けホースよ夏の夕
打水をしてより入るる屋台の灯
丸ごとは一寸苦手と泥鰌汁
一段落しての肩よせ泥鰌鍋
水割りの少し濃い目にどぜう鍋

暮れさうで 茂木和子

暮れさうで昏れぬ夕空時鳥
暮泥む河童出さうなこの涼風
泥鰌鍋古い賑賑と囲みけり
付き合ひ酒の流れに食す泥鰌鍋
好き嫌ひ誘はれてゐる泥鰌鍋

日 傘 矢作水尾

白 昼 柚木治子

ジーンズの日傘の人と京をゆく
遠き帆の白あざやかに夏の朝
ででむしに一万尺の石切場
母の夢ひとりじめして短き夜
著我を活け格式高き仏の間

試飲せりポップな意匠の缶ビール
ダンディーに颯と蜜吸ふ夏の蝶
ゴーストタウン独り芝居の黒揚羽
初めての波にたぢろろぐ海水着
戦かと半身起こす真夜の雷

昼 寝 山中みどり

水のにほひ 由良ゆら女

弁当は完食メはミニトマト
丸まつて胎児のやうな昼寝かな
昼寝児の夢見てるらし笑窪かな
陽の匂ふタオルまとうて昼寝かな
憚からず昼寝の叶ふ老の幸

万緑の一点開け水の音
水分りの朱の祠やかじか鳴く
潮の香の採りたて召せと夏座敷
水鱧や板場朴歯の下駄の音
なには津や栓抜きゆるる船遊び

宝戒寺界限 網野月を

木道 石山かつ子

月輪がらの梵字へ日射し夏の萩
堂涼し黙す諸仏は前を見て
風涼し地蔵は眠り込んでゐる
割箸の杉の柁目や梅雨明るく
なまづ似の土用うなぎの顔に髭

箱階段軋みてあがる泥鰯鍋
泥鰯鍋茶屋に小さな隠し部屋
夏料理神妙にして角隠し
角番の力士のふどし汗滂沱
木道の日に晒され雲の峰

立葵 石井喜恵

雨の蓮 大橋廸代

陽に風に晒す俎板蕝の花
正論の時に疎まし立葵
落日の影をまとひて立葵
寺町や片蔭長き築地塀
片蔭を縫ひて先行く盲導犬

蓮の水玉身震ひしてはころげ落つ
朝の蓮ジャンボ田螺は角出して
右兵衛に見せたき浮葉水の玉
蓮の風玉ころばせる遊びかな
海紅豆雲半島をひた隠す

山越えて 大村節代

鍵いらぬ山家の暮し夾竹桃
アイスクャンデー画鋏跡ある婆の店
山越えて通ふ学校夕立来
かぶと虫山に命を置いて来る
鬼百合や山路半ばで日の暮るる

カンカン帽 小倉倭子

仮面もどき今宵のマスク巴里祭
葉柳に逢魔が時の影睦む
出稽古の襟足撫づる糸柳
鬢付きに挿してやりたや君影草
角が取れ人生八十路カンカン帽

最近の名句集を探る

座談会

司会 筑紫磐井+大西朋
山崎祐子+四ツ谷龍

森賀まり 『しみづあたたかさをふくむ』

堀本裕樹 『二粟』 鈴木光影 『青水草』

◆巻頭三句

坊城俊樹

高橋健文

鳥居真里子

加藤耕子

名和未知男

高橋千草

◆今月の華

市村栄理

藤埜まさ志

◆俳句と短歌の10作競詠

曾根毅

生沼義朗

◆入と作品

永井江美子

句集『風韻抄』

「野火」吟行記

◆好評連載

南伸坊

筑紫磐井

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

俳句へのまなざし

神作研一

てのひらの江戸

藤村公洋

俳句のつまみ

二ノ宮一雄

俳句四季 Haiku Shiki

2022年10月号

9月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

季音月

サイダー 内田恵子

乾杯のサイダー風の通る椅子
 ハンカチーフ少女の尖る顎と爪
 夾竹桃燃ゆ渋滞の高速道
 遠くなる河童の世界栗の花
 たあいなく吹きし大法螺髪洗ふ

祭の灯 井上燈女

百日紅世の片隅に尼の寺
 衿ゆるく着て七夕の宵鏡
 公園に祭のあとの水たまり
 寄付の名も揃ひ祭の灯が点る
 鐘楼を覗く児そこに初の蟬

水 鳥羽和風

沢蟹が番をしてをり水呑み場
 火の匂水のにほひの鵜飼かな
 川宿にせせらぎ馴染む洗鯉
 名水を豊富に流し葛饅頭
 湧き水に接吻したり汗の顔

海月の円舞 森本早苗

水槽の海月の円舞エンドレス
 風鈴とグラスの氷響き合ふ
 夕虹や松帆の浦に松見え
 凌霄の吸ひ寄する道朝の道
 土用餅携へ母御旅立ちぬ

ダリア咲く 松井由紀子

帯締めよと母の叱声あつぱつぱ
 オクターブあがる耳鳴り日の盛
 ジオラマの汽車に乗せたし子かまきり
 ハンカチのなべて真白し慰霊祭
 戦なき地なりぼんぼんダリア咲く

夏の蝶 藤澤喜久

花魁の花に捕はる黒揚羽
琉球の新聞蝶は噂好き
鬼女蘭にアサギマダラはご執心
勲一位おほむらさきは国蝶に
限られし刻を乱舞の夏の蝶

花に蝶に 丸山マスマ

ハンカチを花に蝶にと手品師は
疎覚えのフランス国歌巴里祭
トリコロールのはためく茶房シャーベット
村こぞり祝ふ誕生花葵
打ち水や赤き蹴出しの若女将

青海波 大場順子

打水やはるかに聞こゆこんちきちん
サイダーのシユワツと青春かけのぼる
髪きりり上げて一瞬暑を払ふ
緑蔭に七賢となり囲碁を打つ
涼しさや暖簾にゆるる青海波

夏帽子 高島寛治

どうしても鏡はみでる夏帽子
夏帽に揃ひのリボン姉妹くる
明滅は鼓動に似たり螢の夜
波音を残して花火終はりけり
緑蔭の語らひやがて密談に

巴里祭 梅澤佐江

ピストロの梯子愉しむ巴里祭
青くさき少女の頃や蕃茹熟る
頬撫づる真つ新な風夏の朝
黒塀の続く川筋夏柳
憂きことは風に流せり夏柳

葉柳 森川義子

朝の陽を受けて本領夏柳
蔵町に映ゆる葉柳海鼠壁
炎昼の地熱の火照り纏ひつく
追ひ越せば他人の空似黒日傘
浴衣着る少女の帯の角紋り

走馬灯 渡辺 舍人

へこたれぬ一木の木陰身を預く
姉逝くやコバルトブルーに夏の空
走馬灯亡父母兄妹の影もまた
苦瓜の簾人語の突つつ抜け
ベビーギャング相ずぶ濡れの水鉄砲

八月の雲 池田 雅夫

むくむくと身を振よじる八月の雲
立秋や野を騒がするつむじ風
悠久の時の流れや天の川
霊迎いつもの席に座椅子据え
秋暑し川面を跳ぬる反射光

矮鶏 町野 広子

立葵放し飼ひする矮鶏の群
日々父に似て来し兄よ立葵
先に杖進めて茅の輪くぐりけり
白服や声裏返る中学生
夏服の皺も着こなし街闊歩

青簾 井口 俊晴

青簾今宵は窓を開けたまま
三文字にこだはる暖簾泥鰌鍋
巴里祭や銀座和光で待ち合はせ
軽便鉄道乗りて訪ぬる夏の山
蟻が行く頭と頭ごつつんこ

夏の舞 松宮 保人

梅雨冷や寄らば痛みの話題なり
風通る湖畔の宿の洗鯉
午後三時カラクリ時計の夏の舞
体形の躰なりしや夏布団
土器を五湖一望に雲の峰

夏の山 山田 美佐尾

ハンカチを握りオペラの大団円
木屑道靴がよろこぶ夏の山
雷鳥の神の使ひか夏の山
「静や静」扇片手に沙羅の花
緑蔭や神社の隅に力石

青すだれ 荒井 俱子

青すだれ吊し又もや家籠もり
片蔭に話上手な人とをり
大毛虫尼に一瞬夜又の相
遠景のビルが影絵に西日中
タンは舌ハツは心臓ビール酌む

風 鈴 上戸 千津子

風鈴の音を忘れし真昼時
登山道転げ咄嗟に母を呼ぶ
大雨に鼓が滝の乱調子
故里や半夏団子をいつの日か
蒲焼や土用は忙し鮮魚店

土用干 川崎 道子

朝涼や搾乳の器具動きだす
指先に阿吽の呼吸蟬捕ふ
白南風やボトルシップは抜け出したし
天道虫母の形見の五つ紋
祖父宛の漱石の文土用干

藍浴衣 野口 和子

陽に干すや亡母の仕立ての藍浴衣
夏座敷二階はかつて蚕部屋
換毛の犬のもふもふ夕端居
風運ぶ祭囃子と喧騒と
落ち沙羅の諸手溢れし朝かな

夏座敷 松山 清子

風鎮のかたりことりと夏座敷
花蓮分けくる風に深呼吸吸
本堂の前の大甕蓮の花
橋くぐる納涼船の灯あかあか
大西日風鐸長き影を引く

夏の山 井上 玲子

夏の山樹々の息吹に身をほぐす
峡谷の水は清冽青葉風
鳶の輪見上ぐる浜辺サングラス
オペラはね余韻を胸に半夏雨
思ひ出をたたむハンカチ草木染

軽トラ唸る 正木萬蝶

平成の町村合併水を撒く

古里は黒部の麓水を打つ

誰が打ちし水や逢瀬の帰り道

気に掛かる従姉のピアス

祭炎帝を乗せ軽トラの唸り声

コンビの靴 福田千春

麻服にコンビの靴や父恋し

夏服や少女の胸は育ちゆく

巴里祭トリコロールの飴細工

マカロンの水色が好きパリー祭

炎天や車夫の腓の石のごと

☆ ☆

俳句

10月号 予告

9月24日発売

予価950円(本体864円)®

特別作品 池田澄子・山口昭男・山西雅子

大特集

身近な人を詠む

総論 身近な人を詠む愉しみ……寺井谷子

実作指南 血縁を詠む／恋人恋心を詠む

妻を詠む／友人・知人を詠む

鑑賞 最高の身内俳句

特集

俳句用語を捉え直す

写生／花鳥諷詠／軽み／俳味・俳諧味／滑稽

角川俳句賞作家の四季 秋…岡田由季

短編俳句小説 宮部みゆき『ほんほん彩句』

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

季音花

余生にも青春はある美女桜
近藤徹平

万緑の谷やトロッコ発車ベル
「考える人」への応へ蟬時雨
神實の富士へ拍手山開
糾へる虚実のはざま桜桃忌

百日紅
大塚茂子

ろくろ挽く工房の窓日輪草
さるすべり武人埴輪のまろき肩
夏の雨とんがり屋根の道の駅
ダリア咲き生後十日の目鼻立ち
ポンポンダリア根締め挿して華やぎぬ

半夏の雨
日高道を

師の句碑に半夏の雨の降るばかり
草の戸にひつそり雨の螢かな
卵の花や百寿の母の幼な顔
潮来節菰に卵の花腐しかな
水鉄砲届かぬ人となりにつけり

矜侍
青木鶴城

立葵祖母の教への矜侍かな
気位は未完の大器半夏生
参道の手桶の水や白日傘
尊氏の家紋提灯義父の盆
斑猫や郷里の居間の家庭訓

くさのむし
飛永鼓

色褪せる親子の絆螢狩
手の中の光り見届けくさのむし
短夜のそはそは朝の光りかな
久久の富士の天辺雲の峰
滝壺の白きしぶきや苔の花

万世橋

野田静香

人影に添ふごとをりぬ通し鴨
帆船の光を受くる白日傘
二人して回転ドアへ日の盛
夕立や万世橋のカフェ灯る
状差しに亡き人の文夜の秋

巴里祭

石田慶子

ちやぶ台や湯呑みにワイン巴里祭
ソムリエはアランドロン似巴里祭
そら豆の青き誘惑積もる皮
夏至の日の少し過密なスケジュール
万緑やきやつきやと笑ふベビーカー

夏本番

河野はるみ

青葉闇抜けて喧騒街若し
明治屋の塩キャラメルやパリー祭
片蔭や袴の女かに歩き
峠抜くる風のやさしさ夏の山
見霽かす余部鉄橋涼あらた

祝賀会

熊倉千重子

高温に戸惑ふばかり半夏生
枳酒からビールへ会は沸きに沸き
ふはふはり魔女を装ふ黒揚羽
銭葵奥の旧家を守るやうに
水色を選びてゆるりと宿浴衣

ハンカチーフ

下川光子

極上のハンカチーフは膝の上
ハンカチに「モネの睡蓮」拵がりぬ
ハンカチを振れば別れの風となり
しばらくは猫と分け合ふ片蔭り
覗き見はならずの祠蜥蜴の尾

紫陽花

田中章嘉

紫陽花の一駅までの通り道
紫陽花や予報無視して濡れかへる
蓮の花無情の雨に散り急ぎ
糸とんぼ風に流され孤独旅
虫送り古き写真で座をわかし

立葵 宮崎チアキ

石垣沿ひに一雨待つや立葵
神経の麻痺するやうな炎天下
大海を夏の鯨や愛の歌
滴りの岩肌光る山路かな
子の買ひし派手な仮面や夜店の灯

黒き富士 後藤綾子

夏木立べール靡かせ修道女
夏木立抜けてダム湖の鎮魂碑
打水の忽ち消ゆる土瀝青
終りなき炎暑の中の道普請
七月の武蔵野越しの黒き富士

天道虫 野平美紗子

幼の掌開けば飛びぬ天道虫
丹精の畑の佳人天道虫
天道虫指の先より翔び立てり
滝音を頼りに川を遡る
近付けば滝の飛沫を身に浴ぶる

仙人掌 宮崎紫水

日光をたつぷり入れて海芋咲く
仙人掌の中に流るるラテンかな
向日葵と女生徒すらり肩並べ
連峰のごとくルピナス咲き揃ふ
サルビアの赤に秘めたる矜持あり

梅雨明 中野疆

さくらんぼ輝き朝のデザートに
夏帽子いつもの店でパンを買ふ
梅雨明けて飾る木馬がいなきぬ
夏台風大きく曲る魔術かな
数字好き過去最高といふ猛暑

団扇風 石川理恵

ペン立てに頭でつかちなる団扇
湯上がりの子らへ大きく団扇風
今は無き店の名入りの古団扇
自転車のかごへ七夕竹四本
七夕や佳句さづかりますやうに

夏盛ん

葛城 千世子

石段の手すりにもたれ玉の汗
どんどんと歩けど同じ朝の虹
夏の雲猛スピードの心電図
夏の雲ポスターの無き掲示板
夏盛ん時間の止まる立ち眩み

後ろ影

保坂 翔太

山腹の開拓部落新樹光
卯建立つ旧家の庭に桐の花
梅雨晴の社華やぐ巫女溜
羅や格子戸閉むる後ろ影
語り継ぐ江島生島江戸風鈴

滝

笹本 啓子

裏見の滝の小さき祠に千羽鶴
滝音に阿闍梨の呪文幽かなり
夕闇に一筋浮かぶ女滝
憂きことはさらりと流し心太
天道虫逃げて少女はまた独り

未完のままに

曲淵 徹雄

手を置けば応へてくるる苔の花
梅雨寒や幾年伏する鯨尺
ほうたるや未完のままの円舞曲
浜砂を泣かせて返る夏の波
高き日や海石を舐むる夏の潮

鮎 膳

原田 秀子

先代を凌ぐ女将や鮎見事
色白の女将きりりと白緋
向日葵に母国を憂ふバレリーナ
はやばやと土手をうづめて花火莫塵
乾杯を夫の音頭で鰻重

水羊羹

檜鼻 ことは

梅雨寒や時計仕掛の右心房
雨止んで蛍の夜となりにけり
青空や月命日の水羊羹
青黴や頬に残りし無精髭
夏掛や魚になつてゐるわたし

古道 松島寛久

京育ち 祇園 離子を風に聞く
天照す 大和 島根に喜雨もやう
好きな娘を砂に書けば 卯波消す
青竹にぐらり 山鉾 辻まはし
洗ひ 鯉 近江と若狭の 古道行く

☆ ☆

毎月25日発売 月刊 **俳句界** 2022年10月号
定価1000円(税込)

「俳句界」投稿欄 一流選者14名!
日本一充実の投稿欄

対談
樋口英明
(元裁判官)

私の一冊
宮谷昌代「天塚」

※セレクション結社「ひとつばたご」**宮地瑛子**

特別インタビュー **安原葉**「松の花」

文学の森主催の各賞を鑑賞!
◎文学の森賞: 吉田千嘉子 吉田哲二
堀本裕樹 ほか、入賞者受賞のことば

◎北斗賞: 井越芳子 西村麒麟 藤井あかり
◎山本健吉評論賞: 五十嵐秀彦 岸本尚毅

特別作品21句
江見悦子

タラシて 俳句界NOW **落合水尾**

特別集
私の俳句大原則

安西篤 池田澄子 岩岡中正
鳥居真里子 対馬康子 稲畑廣太郎
高山れおな マブソン 青眼
津川絵理子 小林貴子 田中亜美
鶴田智哉 堀本裕樹 堀田季何
高柳克弘 福田若之 中山奈々
浅川芳直 安里琉太

※一部変更の可能性があります。

株式会社 **文学の森** お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2 田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

『水明誌』を繙く（水明七月号）

中西夕紀（「都市」主宰）

又の世に人を待たせて豆の飯 渡辺舎人

花の昼舞台の景は桜狩 丸屋詠子

この欄を担当することになりました中西夕紀と申します。俳句は舌足らずのものと言われています。その言い足りない部分を鑑賞者が埋めていくのですが、これも鑑賞者によってかなり違うものとなります。世代や環境、経験と様々な違いがありますが、ご自分と違った場面を見るのも一興かと思えます。拙い鑑賞ですが二回にわたり、どうぞよろしくお願いいたします。

「又の世」とは次に生まれ出るべき世、来世のこと。この句の主人公は来世で夫婦になることを約束した人がいるようです。この世で出逢うのが少し遅かった恋人でしょうか。それとも先立たれた妻と来世も共に生きたいという希望でしょうか。そこが想像を膨らませるこの句の魅力となっています。この主人公は人生を大切に生きてらっしゃる方です。来世に向かって急ぐことなく、悠々と豆の飯を食べている大人ぶりが窺えます。来世の人にゆっくり待ってもらって、この世を全うしたいという広やかな心持ちなのかとも思えます。寿命の尽きるまでの生き方を教えてくれる句です。

歌舞伎でしょうか。春爛漫の昼の部です。緞帳が上がると、桜の書割にずらっと並んだお女中の姿。手に手に桜の枝を揺らして駘蕩とした気分を演出しています。桜と言えは花の吉野。私は「義経千本桜」を思い浮かべました。今の猿之助も素敵ですが、昔、先代の猿之助の十八番だった宙吊りのある舞台で、狐忠信という役柄が当たり役でした。

それはさて置き、この句、「舞台の景は」と言って、芝居の第一場、桜狩の場を表しているようです。これから波乱の楽しい舞台も、穏やかに、華やかに始まったようです。非常に手慣れた表現で舞台を見せています。舞台を詠い慣れた作者かと思われれます。

満開の桜の書割の明るさと、迫り出してきた舞台装置の美しさ、色鮮やかな衣装の役者の登場に地元じかの唄と演奏、これらが揃って、観客は幕開けからしばしうっとりとした時間を過ごすのです。この句の作者も花時の駘蕩とした気分の、この時期の芝居見物なわけで、これこそ現実と芝居の中の虚実両方の花を堪能したことでしょう。

現代俳句鑑賞

網野月を

ことりと音して花便り届きしか

今瀬剛一

〔俳句四季〕7月号・巻頭句より〕

上五の「ことり……」は、文字通り郵便受けに郵便が届けられた時の擬態語である。花の既に咲いている土地から、そこに住む友人から、その土地を旅した人から花便りが届いたという意に解釈できると考える。何処からか、誰からかは不明だが「花便り」が郵送されたということと解釈するのが順当であろう。一方で、郵便を受け取るようにして心に届いたという意味で解しても良いように思う。どちらにしても「ことり」という擬態語でその時の瞬間的な速度感を表現している。他に「蜺汁に目のやうなもの薄曇り」がある。

虹二重まひるの輪舞曲すぐ止まる

清水 怜

〔俳句四季〕7月号・草蜉蝣より〕

この二重の虹は半円を重ねて、まるで「輪舞」の形態をしているというのだ。ただし、虹は早々に消えてしまい、「輪舞曲」も「すぐ止ま」ってしまったのである。「まひる」に演出された天文ショーは短く儂い。ただ作者は客観的に、加えて冷徹に眺めていて、残念とも言っていないし、だから美

しいとも言っていない。

眠らない耳を育てる五月間

三宅やよい

〔俳句界〕7月号・新作巻頭3句より〕

静寂の中の「耳」は、「五月間」の中で育まれているのである。季語「五月間」の既成のイメージを超えたところにこの句の存在感が担保されている。他に「半夏生駅の名にある池と沼」がある。

緑陰に誰かが過去を焼いた跡

足立町子

〔俳句界〕7月号・祈りの底〕

「過去」とは何であろうか。取り交わしていた手紙の類であろうか、または他の品物であろうか。その場所だけ、物を焼いた焦げ跡が認められるのである。これが秋の「末枯野」や冬の「枯野」ならばすぐに納得がいくのであるが、上五には空間の設定として「緑陰」という季語が幹旋されている。この意外性もさることながら、「過去」という時空間の奥行きが一層大きなものとなり、作者にとつての重く大きな事柄であることが想像される。

手花火が手の淋しさを照らし出す

高岡 修

〔俳句〕7月号・屈葬より〕

作者の一連の句の中では比較的理解しやすいう句となつてゐる。作者の創作の世界はいわゆるアヴァンギャルドであつて、そのスタンダードは最前線を超えて位置している。掲句も中七の「手の淋しさ」については解釈に難しさを覚える点であると思われる。手元の明りの少なさが「淋しさ」と解することが通常であらう。他に「屈葬がいいな敗北の膝を抱き」がある。

青桐の広葉の上の夜の雲

原 雅子

〔俳句〕7月号・春から夏へより〕

桐ではなくて「青桐」なのである。その「広葉の上の夜の雲」なのである。景としては「広葉」があたかも掌のように「夜の雲」を称賛して押し上げていようにも見える。いわば地味な景を叙して、出来るだけテンションを押し込めている。感情を押し込めれば押し込めるほど、句の中に溜まつている感情の量感が大きいことが伝わってくるような句なのである。他に「渡りつつなほ橋長し夕薄暑」がある。

てのひらほぼく老鷲のなくように

対馬 康子

〔俳壇〕7月号・南郷庵より〕

七五五のリズムである。そのリズムが中七の季語「老鷲」の巧みな鳴き方に匹敵している、と解釈した。確かに鷲の鳴き様は鳴き出しの声を長く引つ張る傾向が聞き取れるかもし

れない。それにしても上七の「てのひらほぼく……ように」の直喩表現のなんと適格且つ巧みなことであらう。「老鷲」の巧みな鳴き方に勝る叙述である。

亡き人のメモの文字です風光る

藤澤 晴美

〔俳壇〕7月号・体温より〕

上五の「亡き人の」から座五の「風光る」の展開で、救われるのである。つまり、それとわかる筆跡のメモを発見して、作者が勇気づけられている、鼓舞されている、と解釈した。中七の「……です」は、作者が誰か第三者へ指し示しているのだらうと解するのだが、もしかしたら作者ご自身が第三者から報告を受けているのかも知れない。兎に角この中七の「……です」の挿入がこの句の表現の核心である。

一生の思い出背負うかたつむり 押し黙る待合室の金魚かな

田辺 幸一

〔俳誌「海鳥」第70号終刊号・絶筆5句より〕

二句ともに主体の行動から、その主体の属性や想いを引き出している。前句の主体は座五の「かたつむり」であつて、背負っているうずまき状の貝殻には一生の思い出が詰まっているというのである。作者ご自身の家庭の幸せだった思いを投影しているように感じられる。「かたつむり」にご自身を模した謙虚さが作者を偲ばせる。次句の金魚は、これも作者ご自身を投影するように思う。上五の「押し黙る」は実景であらうし、作者は無力感を詠んでいるのだらうが、読み手には作者の覚悟を決めた潔さを感じさせてくれる。

創刊百周年に向かって 全国大会の記



井口俊晴

水明通巻一一〇〇号記念全国大会が令和四年七月六日午後一時から、ロイヤルパインズホテル浦和で開催された。三年越しのコロナ禍で延期を余儀なくされてきた創刊九十周年と通巻一一〇〇号の記念祝賀会も大会終了後の午後五時から開催された。コロナ禍終息の見込みがつかない中、開催までには文字通り紆余曲折があった。また、折悪しく発生した台風四号は九州に上陸したが、幸い温帯低気圧に変わり、大会当日は朝から青空が広がった。会場には遠く若狭から駆け付けて下さった鳥羽和風さんら四名を加え、総勢八十三名がマスクをつけて出席した。開会を宣言する網野月を幹事長の挨拶の後、六月二十六日に九十八歳で逝去された吉住光弥さんに黙祷が捧げられた。

山本鬼之介主宰の挨拶

台風が来るといって困っていましたが、なんとなんと、これは「かな女晴れ」と言うべきでしょうか。感謝しなければいけません。水明の去年からの活動をたどってみると、組織も落ち着いて、ホームページも素晴らしくなり、その内にと思っていたインターネット句会も順調に軌道に乗ってきました。私は主宰になって三年余、水明を長谷川かな女の原点に戻すべく頑張ってきました。皆さんも、かな女のように自由な発想で各自の個性を活かした俳句を作ってください。こ

れから創刊百年に向けていよいよ踏ん張らなければなりません。また、二年間お預けになっていた祝賀会ですが、九名の来賓をお招きして開くことが出来て嬉しい限りです。

ところで、「水明の台所」である本会計は誌代と同人費であり、これは毎月赤字ですが、皆さんからの発展基金のお陰で助かっています。有難うございます。また、水明賞、季音賞、かな女賞、新珠賞と、水明にはいろいろな賞があります。今年から鼓笛賞、山紫賞が加まりました。受賞者の皆さんには、毎年受賞者の俳号を詠み込んだ色紙を贈っています。「俳句に名前を詠み込む」ことで私の精一杯の誠意を示している積もりです。高崎から来て下さった原田秀子さんには「子の刻や秀峰をいま夏の月」の句を揮毫しました。それから天・地・人の賞は、それぞれの作品に因んだ句を揮毫しました。

水明の会員を増やすために色々なことをしています。「別所沼公園はじめて俳句教室」は今年で九回目、来年はいよいよ十回目を迎えますが、この講座の受講生が毎年水明俳句会に入会されています。

いま若狭衆が無事到着されましたので、挨拶を終わります。

鳥羽和風氏挨拶

鳥羽和風若狭水明会会長、檜鼻ことは鳥羽谷主宰、島津初

花、飛永鼓の四名が会場に到着。「朝六時に家を出て、こちらに着くのが今になりました。若狭は水明の故郷です。風光明媚な土地なので、皆さんぜひ一度来て下さい」と鳥羽会長が挨拶すると、会場から一斉に拍手が湧いた。

令和三年水明会計報告 日高総務部長

水明俳句会の令和三年度本会計と発展基金の決算内容と現状について日高総務部長から報告があり承認された。収支改善には、偏に会員数の増加が必要であると締め括った。

句集の紹介

山本主宰の「マネキン」・宮崎紫水「花種蒔く」、五明昇「旅信」、故加藤草太郎「仰げば北斗」と、四名もの句集が上梓された。故人を除く三名に花束が贈られ、記念撮影が行われた。

水明六賞授賞

(水明賞)	原田秀子	曲淵徹雄	保坂翔太
(季音賞)	井上玲子	正木萬蝶	
(かな女賞)	網野月を	石山かつ子	
(新珠賞)	森美枝子	元田亮一	後記朝香
(鼓笛賞)	染谷正信		
(山紫賞)	鳥羽和風		

山本主宰から賞状を手渡された受賞者は喜びの挨拶をした後、それぞれの句会から贈られた花束を胸に、主宰を中央に記念撮影に臨んだ。

— 休憩 —

新季音同人・新同人に委嘱状を授与

新季音同人 原田秀子 曲淵徹雄 保坂翔太

「花欄」笹本啓子 橋本京子 檜鼻ことは

松島寛久(以上七名)

新同人 森美枝子 篠崎紀子 池田珪子

元田亮一 秋谷風舎 小林京子

奥山粉雪 佐々木史女 畑宮栄子

丸屋詠子 山岸久美子 山下ユリ子

(以上十二名)

続いて季音「月」への三名の昇欄(井上玲子、正木萬蝶、福田千春)が報告された。

祝電・ご芳志の披露

和歌山水明句会の大橋勉代さん、大阪滯つくし句会の由良ゆら女さん、神戸大池句会の森本早苗さんからの祝電・手紙が石井喜恵さんによって読み上げられた。いずれも欠席を残念がる内容であった。各地の句会から、合わせて三十八件も

のご芳志を頂いた。

兼題句の紹介と表彰

百三十七名の投句者中、八組(十六句)以上の投句者四十一名を表彰。投句数の最高は五明昇さんの五十五組(百十句)だった。また、三極はじめ主宰選の入選句が紹介され、表彰を受けた。

「天」つばくらめ城跡と言ふ石三つ 鳥羽和風

「地」大将も副将も泣き卒業す 五明 昇

「人」行く春や義母の形見のよろけ縞 正木萬蝶

なお、千七百四十八句の応募があった兼題句のうち、特選は四十四句、秀逸は八十三句で、高位得点者の一位は正木萬蝶、二位は五明昇、三位は梅澤佐江さんだった。会場には熱気があふれ、主宰が上着を脱ぎ一呼吸入れる一幕もあった。

— 休憩 —

山本主宰の講評

山本主宰が三極と特選・秀逸句の中から、大会出席者の句を中心に講評した。まず、鳥羽和風さんの「つばくらめ城跡と言ふ石三つ」については「たった三つしか残っていない石を見ただけで、かつてそこにあった城を想像し偲ぶところが素晴らしい」と評した。五明昇さんの「大将も副将も泣き卒業す」では、「剣道部でしょうか、なんと副将まで泣いてし

まったんだから大変な卒業式ですね」と。また正木萬蝶さんの「行く春や義母の形見のよろけ縞」については、「よろけ縞という言葉が分からなくて辞書を引いて調べてしまった。お母さんではなく、義母だというのがいい。義母と書いて無理やりはと読ませてはいけない。義母でよい」といつもの注意も忘れなかった。時に冗談も交えて約一時間にわたって講評した。

大村節代編集著が閉会の辞

昭和五年の創刊以来、九十周年、一一〇〇号記念と、水明の長い歩みを途絶えさせることなく、これからも主宰の下で頑張ってまいります。お天気が回復して良かったです。夏季競詠、第十七水明抄の締切りが迫っています。よろしくお願ひします。

三本締めで全国大会を閉会

水明の半被をまとった山本主宰、網野幹事長、大村編集長が「水明全国大会」の看板を背に壇上に並び、主宰の拍子木に合わせて午後四時半、三本締めで大会を締め括った。

トランペット響く祝賀会

午後五時、全国大会の熱気が冷めやらぬ中、ホテル四階の同じフロアの豪華な宴会場での記念祝賀会である。会場には

十二のテーブルが用意され、それぞれ五人または六人が着席。前列中央には、山本主宰と並んで中村和弘現代俳句協会会長が着席、隣のテーブルには山崎十生埼玉県現代俳句協会会長、ほか七名の来賓がそれぞれ着席され日高総務部長の司会で開会された。

山本主宰の開会の挨拶（水明を長谷川かな女の原点に還すことが自分の使命であると心得て頑張ってきた）に続き、本日の来賓をご紹介し、来賓を代表して現代俳句協会会長・中村和弘氏に祝辞を戴いたが、代々の主宰の思い出話を披露する一方、水明七月号の主宰句の「遠州……」を引用、静岡県出身の中村会長とは不思議に縁が深いことを面白おかしく話され会場を沸かせた。主宰と四名の来賓が水明の半被を着て鏡開きを行い、琥珀色をした樽酒が配られ、コース料理を盛った白磁の皿も次々とテーブルに運ばれてお待ちかねの祝宴が始まった。

宴たけなわの頃、網野月を・日高道を・青木鶴城さんが立ち上がって正面のステージに上がり、トランペット・ギター・エレクトーンによる演奏が始まり一気にお祭ムードへ。思わず会場に拍手が沸き起こった。いつの間にか全員そろって蝶ネクタイを締め、日高さんは頭にちよこんと黒い山高帽まで被る念の入れ様。喜んだ山本主宰が立ち上がって踊りだす一幕もあり、あつという間に予定の二時間が経ち、恒例の水明三本締めで記念祝賀会の御開きとなった。

水明全国大会 会場風景



鏡開き・向かって右より

米山士郎氏(埼玉新聞社ふると報道部長)

小川紫翠氏(埼玉県俳句連盟会長)

山本鬼之介

中村和弘氏(現代俳句協会会長)

山崎十生氏(埼玉県現代俳句協会会長)



鏡開き以外の御来賓

西井洋子氏(東京四季出版・社長)

寺田敬子氏(文學の森・社長)

松本佳子氏(文學の森・副編集長)

石川一郎氏(角川文化振興財団・編集長)

黒部隆洋氏(本阿弥書店)



水明全国大会

兼題

「行く春」(ゆくはる)

「燕」(つばめ)

「大」(詠み込み)

入選句

会員諸氏のご厚志に感謝

今年の全国大会兼題句の応募句数は一七四八句で、昨年比べて若干の増となった。会員の高齢化による応募句数の減少はやむを得ぬことであるが、一方で新人会員の応募増や、超大口応募者に加えてベテラン会員による応募口数の増加傾向が見られたことを大変嬉しく受けとめた。

水明創刊百周年に向けて船出する来年は、応募句数が大台に達してくれることを切に願っている。

主宰 山本鬼之介

山本鬼之介選

【天】

つばくらめ城跡と言ふ石三つ

鳥羽和風

【地】

大将も副将も泣き卒業す

五明 昇

【人】

行く春や義母の形見のよろけ縞

正木 萬蝶

【特選】

いかなご大漁百羽のカメモ引き連れて

森本 早苗

燕擦るほどよき低さ時計台

菊池ひろこ

行く春や札所巡りの前座歌手

近藤 徹平

春暁の海割つてくる大漁旗

矢作 水尾

大利根を知り尽くしたり夏燕

井上 燈女

松園の序の舞春のかたみとす

県境の大河を越ゆる蝶の昼

城跡に建つ学び舎や燕来る

行く春へ顔を傾け伎芸天

足ひたす浅瀬に春の別れかな

若き夢使ひ果たして春惜しむ

行く春や海峡わたる旅役者

武蔵野や燕が飛んで空となる

群燕目差すはブルーインパルス

銀閣二層金閣三層燕来る

ぬきん出て大王松の若緑

使はれぬ煉瓦煙突春の果

行く春や手の平重ね見つめ合ふ

四阿に聴く春の別れのハーモニカ

初燕登檣礼の帆をかすめ

ボンジュール声掛けてみる初燕

大景を詠めず四・五本折る蕨

行く春や大見栄切つて千秋楽

行く春の地球儀の海藍深し

堰越えし春の名残の水一途

行く春や路地に昭和の小間物屋

つばくろや結納の使者門くぐる

人の世に幸せ運ぶ初燕

行く春の後ろ姿や海広し

由良ゆら女

森川 義子

丸山 マスミ

大場 順子

元田 亮一

網野 月を

反町 修

境 延昭

高島 寛治

石井 喜恵

石山 かつ子

越田 栄子

大村 節代

大塚 茂子

田寺 玲子

原田 秀子

大橋 勉代

小倉 倭子

梅澤 佐江

星野 和葉

永野 史代

川崎 道子

宮崎 チアキ

日高 道を

春の果今日が染み込む大夜空
改札を顔パスで飛ぶつばくらめ

一村の民より多き燕来る

軒に来て家族の貌をする燕

春の旅昔語りの大井川

ゆるやかに ترام 行く街初つばめ

去り難き鳴門大橋春の潮

大胆に黄色置く画布風光る

朧月母の遺愛の大和綴ぢ

騎馬像の剣先かすめ初燕

平和てふ大き揺り籠春の虹

初燕「旗艦三笠」を旋回す

大極殿の空ひろびるとつばくらめ

大川に潮の風吹き春終る

【秀逸】

初燕遮る物のなきみ空

交はらぬ燕の軌跡城下町

大原女の紅の襷に春時雨

行く春の座敷遊びの虎の虎

遠霞大地に消ゆる長き貨車

大櫓飾るがごとく春の月

青木鶴城

西幅公子

保坂翔太

柚木治子

小島喜代子

丸屋詠子

向井章子

松井由紀子

野田静香

椎野美代子

正木萬蝶

松山清子

山中みどり

井上玲子

行く春や女人高野の塔の影

春の果チャイム気怠き女学院

行く春や窓なき納屋に人の声

種芋や大地の眠り掘り起こす

大鳥居越えて新緑駆け登る

春行くやメスとシャーレとアルコール

春一番関八州を大掃除

ゆふつばめ白寿の母の葬り終ゆ

画廊出て春の名残の石畳

竹の秋鶉が長鳴く大藁屋

床上げの今日は大安初燕

燕来るかつて紺屋の深庇

大らかに笑まふ羅漢や春の虹

大仏の胎内にあり春の昼

春浅し大さん橋の木の響き

青空の大画仙紙につばめのつ

残照の火の見櫓や春の行く

行く春やちよつと遠出の車椅子

行く春や坂より暮るる港町

永き日や研ぎ屋は鎌の試し切り

蔵町の家は漆黒つばめ来る

行く春やどこへも行かず誰も来ず

行く春や昭和歌謡がラジオから

行く春や尼僧鈴打つ七五調

五明

井上燈女

本橋稀香

佐々木史女

石井喜恵

五明

荒井俱子

田中泰子

笹本啓子

新 曆文

森川義子

丸山マシミ

大場順子

元田亮一

網野月を

池田雅夫

熊倉千重子

加藤でん治

島津初花

境 延昭

鈴木康世

高島寛治

近藤徹平

燕来る大願成就引つ提げて
 黄砂降る大音量の街宣車
 雨の日の雨がつれくる初燕
 行く春や絵筆を洗ふ水の色
 同期会思ひ出拾ひ春行くや
 嬉しさにまた翻る初燕
 大正琴はじく義甲や風薫る
 燕来てつばめ仕様の車庫となり
 水平線のタンカー北へ春の果
 謂れある路上の大樹暮遅し
 春名残り白湯にかすかな甘みあり
 老犬と春の名残に何処までも
 行く春や酔へば情ある顔の君
 男坂春の名残の息をつぐ
 行く春やゆつくり磨く銀の匙
 雨の強きに風の弱きに春惜しむ
 屋根猫を墜す一太刀つばくらめ
 行く春や山の駅舎の小座蒲団
 蔵町の路地知り尽くしつばくらめ
 不意に鳴る春の名残のオルゴール
 ジーンズの釦のほつれ春終る
 式服を脱ぎて一息夕燕
 行く春を惜しみて宿の湯に沈む
 改装の駅舎に迷ふ燕かな

飛永 鼓
 石田慶子
 石山かつ子
 菅原真理
 十倉和子
 大村節代
 橋本京子
 岡田宣子
 町野広子
 藤澤喜久
 井口俊晴
 栢尾さく子
 曲淵徹雄
 小林京子
 網野月を
 大橋迪代
 梅澤佐江
 〃
 〃
 境 延昭
 川崎道子
 渋谷きいち
 綿貫ひさの

行く春やにはか大工の文机
 浅草を宙返りして燕来る
 口笛を乗せて鞆鞆大空へ
 行く春の港の町をパステル画
 燕来る軒先のないビルの街
 SLの春の名残の大汽笛
 行く春や少女の頃の舞扇
 春の雲映る大きなはたづみ
 大げさに誉めそやさるる春シヨール
 老鷺や大音声の谷渡り
 行く春や水脈長く引く連絡船
 行く春や広場ではづむ天使達
 杉玉の軒を掠めて燕飛ぶ
 京墨をゆるりと磨りて春の行く
 補聴器の音最大に春逝きぬ
 大仏と内緒話や春の海
 大人しい子供のおえてこどもの日
 春の日や有閑猫の大あくび
 行く春や想ひ届かぬエアポート
 春惜しむ青草を踏む散歩道
 大鳥居潜れば落花敷きつめて
 其れ其れに夕餉の匂ひ里燕
 誰がための寝化粧春のかたみかな
 燕来る目白赤坂青山に

宮崎チアキ
 日高道を
 加藤でん治
 田中章嘉
 青木鶴城
 保坂翔太
 柚木治子
 石川理恵
 〃
 野口和子
 横山君夫
 篠崎紀子
 後藤綾子
 山田美佐尾
 茂木和子
 梅澤輝翠
 内田恵子
 山中いちい
 野田静香
 霜多光代
 上戸千津子
 正木萬蝶
 〃
 〃

佳作

行く春やレコードで聴く春團治
行く春や恙無き日々こよなくて
行く春やベルトの穴にも疲れ来て
行く春や壁一面の航海図
大役を果す子役の春の宴

染谷正信
井関礼子
瀬戸雄二郎
西山貴美子
河野はるみ

いかなご解禁大鍋のうきうきす
ほろ酔ふて壺中の天や燕来る
行く春や車夫ひたひたと雲母坂
上下する春の名残の井戸釣瓶
八十路よし風も燕も吾を掠め
行く春や木遣り流るる起工式
表札を外す生家や春の果

森本早苗
由良ゆら女
菊池ひろこ
近藤徹平

行く春や手に鬼平の江戸古地図
啓蟄の虫の大小ファール記
大観覧車見守つてゐる春日傘
初つばめ若草色のランドセル
行く春の鼻梁まぶしき観世音
ゆく春の彩をまろばせ御殿鞠
行く春や酒杯に開く花ひとひら
蒸気機関車汽笛を長く春行けり
透きとほる夕星春のかたみとも

関根千恵
大塚茂子
森美枝子
大場順子

大いなる鳶の旋回春遊けり
大学の艇庫開かれ芦の角
大船も漁舟も遠く春の潮
行く春や雲脚速き八ヶ岳
行く春や微速で上る達磨船
行く春や鳥並を縫ふ連絡船
行く春や沖を見てゐる竜馬像
浮沼に鯉の揉み合ふ春の果
風一陣遠流の鳥の初燕
山宿に長逗留のつばくらめ
晩学の大志を抱き青き踏む
大江戸の上水跡や梅見頃
陽炎へキーパーの蹴る大キック
暮れ泥む大和三山花ぐもり
うぐひすの声の調ふ大江山
大川端にお江戸を偲ぶ桜餅
大願を遂げ田楽の串を抜く
大利根に古利根川に春の月
大極殿の薨の綺羅や夏隣
子燕の大口小口餌をねだる
時刻表通り来ぬバス初燕
朧夜の大きく滲む影絵かな
行く春を背に菩提寺の大師像
音も無く風切る燕道の駅

矢作水尾
五明昇
井上燈女
本橋稀香
佐々木史女

早春の光りを弾く大水車
 非常線やすやす超ゆる初燕
 一日を豊かに生きて里燕
 のどけしや猫につられて大欠伸
 空見れば続いてゐると春の別れ
 引く波に光を乗せて春逝けり
 行春や風の声聴く古墳群
 人よりも燕の多し里の駅
 夕つばめ軋む朱塗の神楽殿
 大鳥居隠るほどの新樹かな
 解体の家を巡りて燕啼く
 行く春や束ねて捨つる日記帳
 今もなほ屋号の旧家里燕
 一の関二の関潜る夕燕
 行く春のひと日雑事に終りけり
 補助輪を外しジグザグ春の果
 大谷石に柳の影や蔵の街
 子らそれぞれに大きな夢を石鹼玉
 蒼天のひと筆書や初燕
 清方の大回顧展風薫る
 手に慣れし春の名残の花鉢
 大看板に最眞の役者春の宵
 吊橋を潜り一閃川燕
 行く春や光遊ばす波がしら

石井喜恵
 〃
 〃
 荒井俱子
 〃
 奥山粉雪
 越田栄子
 〃
 〃
 田中泰子
 〃
 笹本啓子
 新 曆文
 森川義子
 〃
 〃
 緒方みき子
 野田静香
 〃
 〃
 丸山マスマ
 〃
 〃
 〃

燕や漁師の村の細き路地
 行く春や夕日を惜しむ二人連れ
 行く春やささくれ残る竹定規
 看板に日陰のじみ春惜しむ
 つばくろや去年のお前ではないな
 黒雲の中や燕の澄まし顔
 Tシャツの大きなハート青葉驛
 大伯母の米寿ピンクのカーネーション
 向ひ風発止と受けて行く春ぞ
 農日誌「燕来たる」と赤き文字
 あかときをつばめ一閃また一閃
 使者のごと被災地巡るつばくらめ
 大仏の胎内出れば風光る
 つばめ来る千本格子残る古都
 行く春や海へ響けと大太鼓
 蔵町が好きでつばめの宙返り
 行く春や太古のままの青き空
 大通りゆつたり過る孕猫
 生れし家の煙な忘れそつばくらめ
 霞立つ大和三山麗しき
 春の月しじまに泛かぶ大社
 つばくらめ窓開けて待つ葦葺き家
 大仏や伸びをしさうな春の朝
 春の昼城下にのこる大工町

丸山マスマ
 元田亮一
 〃
 網野月を
 〃
 〃
 〃
 〃
 〃
 池田雅夫
 〃
 〃
 熊倉千重子
 〃
 〃
 〃
 〃
 加藤でん治
 〃
 〃
 〃
 反町 修
 〃
 湯浅 和
 境 延昭

啓蟄や歩兵大尉の祖父の墓
 木木芽吹く美大の煉瓦一号館
 大学に小さきチャペル風光る
 うららかや都大路を人力車
 春満月大きな希望湧いてくる
 剥き出しの梁に電線つばめ来る
 燕一閃夕日の中の帆掛船
 初つばめ希望の文字を空に描く
 春行くや富士は素顔をさらけ出す
 大富士を茶畑にのせ茶摘唄
 仏像の目蓋は重し春の果
 先陣を争ふ燕千枚田
 磨崖仏の背に隠るつばくらめ
 我が村に宿屋一軒夕燕
 御披露目の曾孫の笑みやつばめくる
 売家の看板かかり春の果
 色褪せし季寄せの表紙春の果
 大部屋の隅にも意気地こぼし咲く
 行く春や一芸に湧く大道芸
 大つぶの涙する稚あたたかし
 たんぼの絮大空へ夢のせて
 倭の国の水の豊かに燕来る
 うららかや山門に吊る大草鞋
 大空へ飛びたし千の花辛夷

境 延昭

指立てて風をよむ爺代を搔く
 行く春や更地になりし馴染み店
 目の前の景色切り取り夕燕
 初燕デビユーきりつと燕尾服
 行く春や振り返りゆく小犬の目
 初つばめ氷川の杜の能舞台
 花篝大鯉ぐらり反転す
 悪役を吸ひ込む奈落春の果
 春の山大足さらす寝釈迦仏
 のどけしや呵呵大笑の芝居小屋
 春の果地図を片手に一人旅
 背伸びして手を振る子供つばくらめ
 遠足の列くぐりゆく大鳥居
 行く春やずらりうだつの残る街
 胸躍る大看板の春興行
 慣れ怖し地震速報春の果
 行く春や色とりどりの傘駅へ
 小用の背を掠める初つばめ
 行く春と再会約す六地藏
 肥大する前頭葉や春の夢
 どちな子をそつと見守るつばくらめ
 大聖堂の鐘鳴りわたる復活祭
 行く春の湖北にねむる仏達
 燕来る吃水深き伝馬船

石山かつ子
 菅原真理
 綿引まりこ
 木村るみ子
 十倉和子
 大村節代
 橋本京子
 岡田宣子
 外村紀子
 菅原卓郎
 檜鼻ことは
 河野はるみ
 田寺玲子

大吉の神籤を枝に春ぞ行く
 行く春や上野の駅に啄木碑
 瑠璃色に光る一瞬燕の背
 夕燕高きを飛ぶや明日は晴
 春昼や双子同時に大あくび
 うららかや豆大福の豆が好き
 行く春や鯉は列なし廻る
 抱卵の燕来て居り海の家
 ひしめきて育つ幸せ燕の子
 大安のこぼれる笑顔春一日
 大島袖着て歌舞伎座へ春の宵
 花びらの部屋に舞ひ落ち春の果
 行く春や別荘に灯りなく久し
 行く春をスマートフォンにをさめけり
 行く春や高きに止まる観覧車
 桜さくら都大路を桜人
 滑空の姿雄々しやつばくらめ
 行くや春己に叱咤激励す
 荒鋤きの畝黒々と初燕
 大安の日と決め種を蒔きにけり
 行く春や津軽三味線ひとり旅
 飛行機雲に仰ぐ大空夏近し
 春の潮海原戻る大漁旗
 大河への道のり遠し花筏

保坂翔太
 〃
 柚木治子
 〃
 石川理恵
 〃
 小島喜代子
 〃
 〃
 森下美智枝
 〃
 野口和子
 〃
 高原和子
 下川光子
 〃
 山岸久美子
 〃
 横山君夫
 〃
 佐藤克之
 丸屋詠子
 村杉清吉
 斎藤みよ

大手門くぐり御苑の春景色
 旧道の宿場燕の空となり
 つばめ来て旧家の軒の明るめり
 観覧車春の行方を高みより
 春行くや夜明けの雨の乱調子
 朝の寂破る燕のひな三羽
 春兆す鉄は大地を打ち返す
 逝く春や内緒話の羅漢さん
 大空に吸ひ込まれゆく揚雲雀
 行く春や埴輪の並ぶ丘を来て
 春の果見知らぬ人と城跡に
 大様に彩弾き合ふ錦鯉
 飛魚の深呼吸する大海原
 初燕大海原を舞台とす
 行く春や媪五人のおままごと
 園庭の大きな櫛半仙戯
 弧を描く残像ばかりの初燕
 草萌や大室山を一色に
 軽やかに谷を飛び交ふ岩燕
 行く春や縄文住居丘の上
 秩父路の順礼二人春惜しむ
 行く春や山往く僧の新草鞋
 初燕古墳の空を高く飛ぶ
 よく廻る三連水車つばくらめ

斎藤みよ
 〃
 松井由紀子
 〃
 〃
 篠崎紀子
 〃
 諏訪サヨ子
 〃
 向井章子
 〃
 茂木和子
 梅澤輝翠
 〃
 内田恵子
 〃
 山中いちい
 飯室夏江
 仲田利子
 〃
 霜多光代
 〃
 〃
 椎野美代子

私の三句

井上玲子

詩を追ひ逃水を追ひ八十路かな

私が俳句を始める切っ掛けとなったのは、偶然の出合いから始まります。或る音楽会で広瀬とし先生。長谷川博先生に出合ったことに始まります。広瀬とし先生は、長谷川かな女の愛弟子で、水明発展の基礎を築かれた方なのです。又長谷川博先生は、かな女の御養子でフルート奏者であり、長谷川秋子先生の夫です。この方々と偶然出合ったことで、広瀬とし先生から「俳句をなさいますか」とお誘いを受けました。しばらく考えさせていただきましたが、チャンスに巡り合ったのだと思い御指導いただくことにしました。

偶然には神様のお恵みだったのかもしれない。七十歳の時です。俳句の道は奥深く、逃水を追うように、これで良いと満足することはありませんが、余生を楽しく生き生きと過ごせることは、本当に仕合せと思います。

秋めくや池塘に影を千切れ雲

尾瀬ヶ原には大小様々な池があり、美しい風景を引きたてています。湿原の泥炭層に出来るこうした水溜りは、池塘と呼ばれています。これらの水辺はその地域に生息する生物にも貴重な水源となっております。

夏も過ぎ去り、秋風が吹き始める頃此の池塘に千切れ雲が浮かんで見えます。夏の終りを懐かしむ気持と、これから迎える秋に対する喜びと交錯した気持です。

噴煙は太古の息吹冬晴る

箱根火山が活動しはじめたのは、今から五万年前からだそうです。今でも大涌谷の火口域で活発な噴火活動が続いており、火山灰などごく小規模な噴出が突発的に発生する可能性があります。澄みきった青空の下に富士山が聳え立っております。噴煙の強い硫黄の匂いのする玉子を買って食べながら帰途につきました。

私の三句

正木 萬蝶

良禽の嘴まろし寒卵

根拠がある訳ではなくイメージです。人もその他の生き物も賢いほど性格や行動が穏やかではないでしょうか。鳥の場合はその象徴が嘴の形だと考えました。力や武器では無くて知恵を巡らして獲物を得たり危機を脱しようとしみます。猛禽類は嘴鋭く力づくで獲物を捕獲します。鴛鴦など上品そうで可愛らしい嘴を持っています。

現代は栄養たっぷりの食品が溢れていて卵も赤玉やビタミンたっぷりの卵など種類も豊富ですが、寒卵と云う響きに有難みを感じます。寒卵ならどの料理も美味しに決まっています。TKG即ち卵かけご飯が寒卵に一番相応しいのではないのでしょうか。日本人に生まれて良かったとつくづく実感する瞬間と思います。

此れやこのブエノスアイレス盆の月

まだ行ったことが無い、行ってみたい憧れの国、都市の一つです。八月は冬、気温は平均最高十七度最低十度だそうです。ブエノスアイレスとは「良い風」の意。ボカ地区がタンゴ発祥の地だとか、知識が無いのでウィキペディアに頼りました。南半球の盆の月を詠んでみたいと思った時にこの句が浮かんできました。大仰な形容の此れやこのが適当かどうか自分の中で未だに疑問です。

南半球なのでお盆の時は冬になります。当然、日本の夏の

月とは違う月であると思います。あれやこれやと想像を掻き立てられブエノスアイレスの迷路に迷い込んで楽しみました。哀愁を帯びたバンドネオンの音色と薄暗い路地裏や街頭で絡み合う様に踊る二人、それを眺める人々。これは夏の光景と思います。が季節を問わず機会があれば訪れてみたい強く思っています。

閨怨の浅き眠りやほたる降る

日常的には殆ど目に触れない耳にしない言葉であると思いません。

理不尽にも一方的に別れを押し付けられたがまだ心は残っている。未練、口惜しさ、淋しさ等々複雑な境地がこの閨怨と云う言葉で、何とやるせなくいじらしい。

源氏物語に登場する女性達の嫉妬、憎悪、不義密通等はまさに閨怨であると思います。蛍の淡い光は求愛信号らしい。その光を一人眺めるのは酷であります。

蛍は肉食、少し逸れますがあの可愛らしい流水の妖精のクリオネも餌を食べる姿は残酷でイメージが狂ってしまうと聞いた事がありました。

閨怨で枕を濡らすなど現代では殆ど無いでしょう。自分に非が無ければ堂々と事実を述べてさっさと別れます。私の周りにも数人いて彼女らは生き生きと人生を謳歌しています。そして新しい人と明るい気持ちで蛍を眺めていることでしょうか。この次はこの様な明るい蛍を詠みたいと思います。

私の三句

染谷正信

コックスは美声で美男競漕会

私が入社した会社は、非常にボートが盛んであった。私の所属した部はボート部員が多数おり、私の上司の課長はボートの監督であった。毎年五月の連休に戸田のコースで社内ボート大会が開催され、新入社員は必ず出場しなければならなかった。五時の業務終了と同時に戸田に駆け付け、ボート部員の指導を受けた。最初の二日間は、オールを漕ぐ型の練習、三日目に初めてボートに乗った。「舵手付ナックルフォア」と言う、コックスと漕手四人の競技である。コックスの号令に合わせて漕ぐのだが始めは全く前に進まない。漕手四人の呼吸が合い、何んとか漕艇の形になるのに一週間かかった。大会の千米はとにかく苦しかった。ゴール通過と同時に全員前にうっ伏した。コックスは音楽で言えば指揮者である。コックスの声に合わせて漕手は皆同じペースで漕ぐ。一人だけ抜き出ても駄目である。ボートは正に協調性のスポーツだ。

撫で付けるコールマン髭炎天下

私の小学生の頃（昭和三十年代前半）は、夕刊に毎日大きな写真付きの映画の広告が載っていた。特に洋画の広告は、田舎の子供には興味をそそり、好奇心を掻き立てるものであった。ロナルド・コールマンの顔は、多分その中で記憶したものと思う。伊達で粹なそのマスクは、日本の男優と全く違

った印象があり、私の脳裏にこびりついたものと思われる。昨年夏、手元にあった『西東三鬼全句集』に載っている、目ん玉をむいて、腕を組んでいる、口髭の三鬼の写真に気が付いた。当時、三鬼に関する三橋敏雄等の文を読み漁っていた私は、コールマンと三鬼を重ね合わせると面白いと思い、この句ができた。

仲人の粹な都々逸金屏風

昭和四十七年頃の、私の友人結婚式の事である。仲人は、新郎の上司で都内大手の信用金庫の支店長であった。主賓の挨拶が終り、座が和み始めると、仲人が「今日は、私の自作の都々逸を皆様に御披露したい」と言い出した。三味線の伴奏はなかつたが、手振り、身振りを交えて数章を唄った。かなり艶っぽい都々逸で、満場拍手喝采となり、新郎新婦が主役の座を譲り渡した感であった。今から考えると、地元旦那衆との付き合いは支店長の大事な仕事であり、その芸は、仕事のために必死に練習し、身に付けたものとも思われる。都々逸は、三・四、四・三、三・四、五の二十六音であり、私も入門書を買って独習したがそう簡単に作れるものではなかつた。自然を写生する事も俳句と思うが、それだけでは何か物足りぬ。「人間のいる俳句」、「自分のいる俳句」を目差して、精進したいと思います。

私の三句

鳥羽和風

若狭は水明の故郷と言われる由縁は二代目主宰長谷川秋子から始まる。秋子の父知水は若狭町上黒田の出身で嵯迷（鬼之介主宰の父）はその弟に当地を訪れたと聞く。鳥羽谷先人達の話に主るとかな女主宰は度々若狭の地を訪れたと聞く。又歴代の主宰も若狭で句会を開き水明との懇親を深めたそうである。瓜割の滝の名水公園には水明歴代の主宰の句碑があり近くの鳥羽公園にも知水、嵯迷、翠保、城子の句碑が建立されている。特に知水嵯迷両氏は水明発展に献身的な努力をされたと聞く。この度の山紫賞の三句は何れもこの名水公園の情景を詠んだものである。名水百選に選ばれた瓜割の滝一帯はこんこんと湧き出づる真清水が滝となつて我々を楽しませてくれる。境内奥の石段を上りつめると権現山の中腹に大師堂がありその周りを八十八の石仏が取り囲んでいる。四国八十八ヶ所の不思議な伝説がある仏達である。温和な顔付の石仏達は瓜割の滝の水音だけが聞こえる静けさの中で降りそそぐ木漏れ日が二百年の歳月を経た石仏達をおだやかに包み込んでいる。

好きな子へパチンと輪ゴム春を待つ

この公園には近隣の町より子供達が沢山遠足にやってくる。あちこちでお昼の宴となる。子供達の間ではおかずの交換も始まり楽しい一時である。誰かがおにぎりの輪ゴムをパチンと飛ばした。少年期の淡い淡い恋らしき思い出として残っている。

花木筆句碑を読める子読めない子

名水公園には次の水明主宰の句碑がある

ねばりひきあるかと田向ふの初蛙

犬吠ゆる冬山彦になりたくて

渡り鳥消えたるあとの置筏

瓜割の滝に樂あり新松子

句碑の前に大きな池があり色とりどりの鯉が泳いでいる。

餌を与えると音を立てて盛り上がってくる子供達の人気のス

ポット。

中学生であろうか句碑を読み始める。くずし文字が難問のようだ。滝音に流れる様なくずし文字は清涼感をも感じさせる。子供達は帰路につくさいポットには名水を満たんにして帰って行くのである。

雨蛙旅に出る日の雨女

私の家は祖父の時代から旅館を営んでいる。この日のお客さんは熊川宿と名水公園へ行く予定と言う。朝から晴れていた空であつたが出発間際に曇り始める。お客さんの中に名うての雨女が居るらしい。やっぱりなと誰かが呟いた。私とするとどうか今日一日降らないでほしいと思つていたが昼過ぎからぱつりぱつりと降り出した。あの雨女さんきつと皆に申し訳ない気持で帰路につかれたに違いない。不思議に当るものである。だから雨女の名前を貰うのであろう。気の毒でありかわいそう。

山本鬼之介 選

水明集

六月の雨に爪弾くマンドリン
山並に六月の葉の濃かりけり
六月の野に置き去りの六地藏
廃校の窓をかうもり掠めたり
汗拭ひ大歓声の村芝居

さいたま 篠崎紀子

格安のパジャマ気に入り夏の夜
ガラス戸に白粉残し火取虫
でむしに会へば八十路も童歌
短夜を語り明かせし三姉妹
酌み交はし来し方語る夏の宵

清水桂子

蝙蝠が夜汽車を送る山の駅
六月の木々を映して寺の床
蝙蝠は街の灯避けて闇の中
蝙蝠が四門守るや中華街
物干に玉葱吊るす藁の家

さいたま 新井孝磨

初螢追うてひとりの弁天堂
五月雨写経の筆の重きこと
綿菓子先の先をつままれ夏銀河
黒南風や便書の宛名滲みをり
出世する友は便巧道をしへ

梅澤輝翠

十葉や一面白き星のごと
腹を割り話したきこと夏椿
明滅はまさに螢の息づかひ
蒼天を滾らすごとく五月富士
茅の輪くぐり見上ぐる森は神の域

菅原真理

冷蔵庫の高きに眠る猫の腹
消えて知る螢の闇の深きこと
底力秘めて十葉はびこりぬ
雲上に顔出す高嶺明早し
産土の友の便りや五月晴

西幅公子

尺を取る女性テラー虹立ちぬ

さいたま 反町 修

故郷や墓石の屋根に苔の花

緑蔭に返るこだまや赤き屋根
玉葱や一皮剥けて二兎の父

母港へと南風を孕み練習船

六月や松葉の芯が天に立つ

早梅雨裸体を曝すダム湖かな

蝙蝠や無声映画の如く飛び

月涼し白球を追ふ万の目

玉葱に負けて涙の夕餉かな

音頭取る鳶の頭や夏座敷

染谷正信

平塚 丸屋詠子

苔咲くや天の岩戸の神懸り

黒雲や梅雨が連れくる偏頭痛
全方位植田の中の道を行く

仲見世を喧嘩結びの祭笛

石垣の寂むらを彩る花菖蒲

短夜やかつて御国に通ひ婚

十葉に占おぼれたる古屋敷
嫋やかに茅の輪を潜る異国びと

空梅雨や村中廻るちんどん屋

六月や纏るる糸のなほ固く

渋谷きいち

さいたま 山岸久美子

六月の空へ投げたるブーケトス

品格のただよふ花や泰山木
曲り屋の民話語り部涼を呼ぶ

瞬けば声を殺して蛍狩

川風に白鷺じつと佇み居

引き返す辛き決断夏の星

川の面に羽衣めくや夏の雲

蝙蝠や投げたる下駄につられ落つ

バリバリと天を切り裂く雷火かな

上尾 横山君夫

村杉清吉

遠雷や遠くを見よと父の声

早梅雨狛犬の口乾きけり
灯籠の影に寄り添ふ苔の花

父の日の僅か二行の子のメール

六尺の白が街行く三社祭
百穴に人目を避けし苔の花

隣村は離島のごとし青田波

庭石の引立役か苔の花

何はさておき老いを元気に鰻食ふ

しらじらと短夜明くる山の神
短夜や昨日の夢の続き見む
禪寺の庭の片隅苔の花
竹林に響く尺八半夏雨
山頂の岩に張り付く苔の花

さいたま 千坂平通

碁会所の窓に詰め寄る灯取虫
夏服や親子相似る背格好
結界の気を満身に大茅の輪
家ありてなほ求むる居場所かたつむり
鎌休め畝間に蝸牛見送れり

越谷 阿部幸代

ふるさとはいつも青空夏料理
静けさにやがて耐へかね河鹿鳴く
かたはらの静かな鼓動螢籠
螢雪のころ遙かなり桜桃忌
星空の青き自画像大宰の忌

元田亮一

「入口」と古き木戸札柳絮舞ふ
春愁や白磁に色を探しをり
麦の秋回転木馬の弾の痕
蝙蝠の乱舞夕陽を隠しをり
奥付けに父の落款黴拭ふ

さいたま 池田瑠子

野を渡る風はさみどり新茶汲む
南風呼ぶフラの指先腰の振り
鐘鳴らすみはらしの丘大南風
紫の新じやがにあるインパクト
父の日や遺影は少しはにかみて

熊谷 越田栄子

けふ梅雨の入りてふ隅田厩橋
梳る髪を崩るる梅雨入かな
麻服を預りしまま余熱あり
心太突くや音なく沈みをり
海猫やこの世は白か黒じやない

小林京子

草に寝て草を旅する蝸牛
やはらかくころげ落ちけり蝸牛
笹舟について行く畦走り梅雨
そのままに置かれし農具梅雨茸
見はるかす外輪山に緑雨かな

さいたま 本橋稀香

淑やかに格別の日の夏衣
夏の宵語りに乗せし笙の笛
あけぼのの湖面に映る五月富士
優しさに恋の予感の蛩狩
道端の十葉香る夕の雨

野村美子

はえ立つや活気漲る鮭漁

さいたま 加藤でん治

三枚に下ろし夕鯨叩きけり

夏燕この家に嫁して五十年
御柱祭おんべ振り上ぐ男衆

若狭 山崎郁子

山峡は外灯一つ集ふ火蛾

父の日や煙草を止めぬ父憎し
父の日や父に甘ゆる術知らず

夏座敷正座して読む歎異抄

夕薄暑農良着脱ぎ置く上がり口

誰にでも昔ありけりソーダ水

若さうに見ゆる夏帽蹟くな

杉戸 佐々木史女

空歩くスカイウォーク五月富士
机上より小さき窓に五月富士

さいたま 竹澤和子

夏帽の廂をあげて今日の雲

巫女放つ氷川の杜に宵螢

花菖蒲開くことなき長屋門

螢火や蚊帳の暮らしを懐しむ

通院の帰路に見にゆく花菖蒲

鮭の腹研ぎし庖丁ためしみる

散りもせず恥らふ雨の濃紫陽花

香水の残り香に問ふ君は誰

伊予 向井章子

青山を背負ふばかりにかたつむり
でむしに神がたまふや渦の城

伊奈 菅原卓郎

声高に行き交ふ朝の代田道

灯取虫さまよふ闇の古墳群

韭の花昼に間に合ふ焼餃子

人里を恋ふる灯虫や玻璃打てり

決めかぬる梅雨入り間近の行程表

うなぎ待ち酒で紛らす小半時

水喧嘩有りし泉の静寂かな

香水や少し気取りてフルコース

さいたま 斎藤みよ

短夜やテレビで寝落ち夢で起き
すずらんにしやがみ娘はあどけなく

吉川 杉浦理恵

彼の地へと開く地図帳梅雨深し

黴の花パン一斤を持て余す

ママチャリの並ぶ公園梅雨晴間

蜘蛛の糸揺らす水玉空青し

プラネタリウム涼し我身は鳥心地

戦ひのニュースすずらん庭に咲く

笹竹に昼顔楚楚と蔓伸ばし

山風や青田の匂ひ連れ来る
虹消えて返事なきまま別れゆく
大瑠璃の声のみ響く過疎の村
白鷺の一声高き汀かな
返事なき外国の吾子夏の果

さいたま 霜多光代

身の丈に合ふ暮らしとは新茶くむ
更衣母の残せしシャツ羽織り
緑蔭や二匹の猫のにらみあふ
蛩舞ふ仄かな光悠久へ
雨似合ふやはり好きです濃紫陽花

東京 畑宮栄子

夏蒲団干して半日待ちわぶる
緑蔭の葉裏越しなる日の光
夏掛や添ひ寝し吾子も父となり
ビル街に緑蔭低く低くあり
川の辺に日傘の影を残しゆく

川口 新井のり子

シーソーのリズムゆつくり春深し
鳩時計の眠たげに鳴き春深し
藤浪やむらさきの香に包まれて
初孫のお宮参りや藤香る
藤棚の真中に入りて別世界

さいたま 後記朝香

私語ささめに聞き耳立ててて蝸牛
何処から何処へ行くや蝸牛
気遣ひのラインが届く梅雨の朝
火蛾襲ふ夜間工事の投光器
格式の高き料亭夏の宵

さいたま 飯田忠男

待つ人の居れば買ひたる鰻かな
白山小屋足下に聞く雷の音
青蛙見沼田圃を賑ははし
風薫る孫子にひかれ善光寺
鱧釣りの竿並びをり越の浜

春日部 仲田利子

バリトンの声心地好し夏の月
裏声の「もののけ姫」や若葉風
父逝きし日や六月の朝ぼらけ
蝙蝠の飛び交ふ時刻下駄の音
オペレッタの「こころ」歌ふコンサート

鳴海順子

必見の巫女舞涼し和の調べ
九輪草の仙境迎る女人旅
肝吸ひに七代の味鰻食ぶ
古利根や小舟操り鰻漁
老木の再生謀るはたた神

春日部 諏訪サヨ子

大阪やみな飛脚めく夏帽子

大阪 遠藤人美

淀川の行く瀬咲き添ふ花菖蒲

落慶の寄進瓦や夏はじめ
卯浪立ち練番屋の大竈

さいたま 森美枝子

立葵群れを離るる女学生

あかつきの姉御のほぐす祭髪

かりそめの本音洩れ聞くハンモック

合鴨の入りし植田のにぎにぎし

ロープウェーいざ万緑の只中へ

十葉や使ひ込まれし土瓶鳴る

明滅や両手を広げ蛍よぶ

さいたま 小川洋子

足照らす夫の化身か草蛩

麦飯を噛む麦飯も笑ふやう
だからだと氷菓を舐めて彼の日思ふ

吉川拓真

腹ぺこのエンジェルの胃に笹粽

乙女ゐて炭酸水をこぼしけり
蜜豆に「人間失格」暫し閉づ

十葉の占領許す空家かな

お笑ひの声に甘酒なじみけり

リハビリに励む回廊五月富士

天井の守宮の影や忍者めく

岡田宣子

紫陽花と挨拶交はす仲となり

川村 治

水田を通る涼風なびく髪

初デート気取り香水そつとつけ

網の真中に威容を誇る女郎蜘蛛

突然に道に草立つ大夕立

明易し推理小説読み耽ける

猛ダッシュすれど抜かるる夕立かな

明易し乗客増ゆる始発駅

久方に会ふ友の顔梅雨に濡れ

足の毛の忍者のごとき守宮かな

小駒さち子

初鱈厚切りにして漁師飯

川崎 鈴木玲子

出番待つ陰で色変へ家守の子

黄昏れて雛罌粟の日の終へにけり

梅雨の星しつとり赤く瞬きて

若者の掛け合ひ稽古緑蔭に

麦星や黄金の波を贈りくる

雛罌粟はいつも太陽連れてくる

紫陽花や小径小徑に愛づる人

緑蔭に関東大震災の碑

十葉や讚美歌響く礼拝堂

雨待たず其はばさばさの四葩かな

梅雨寒やかみつき亀の増殖中

天晴な引き分け試合麦の秋

玻璃戸から腹で合図の守宮かな

紫陽花や手形アートの咲き誇る

岩の上縄張るごとき河鹿笛

桜桃忌飯をほほばる孫の笑み

文楽の道行きのふと桜桃忌

桜桃忌忘れしシャツの豊みじわ

内川に垂れし枇杷の実今さかり

金魚舞ひ童謡歌ふ熟女たち

山の道通せんぼする蛍袋

石碑建ちダム湖映ゆるや初夏の午後

柿若葉古式豊かな和歌祭

音無し的一年が過ぎ梅雨の星

梅雨の星雲を掃き出すけやきかな

欄干の海猫王冠を造りをり

乳飲み子の足先を這ふ家守かな

校門に吸はれし童夏木立

さいたま 綿貫ひさの

さいたま 山戸美子

螢火や人より多く点滅す

玉葱を切るは涙の定めなり

梅雨入りに予定は未定ハイキング

宵螢男やもめの肩に乗る

梅漬くと夫差し出すやブランドー

橋爪さなえ

結葉を仰ぐや青き実を見つけ

音信のとぎれし人や卯の花腐し

その寺は四葩一色水の色

そよ風や身をゆだねるる昼寝人

南風白に替へるやスニーカー

和歌山 南條きわゑ

夕焼空自転車を押す坂の道

坂上の古刹を包む若葉雨

店頭の新茶の香り計り売り

夏さざすよたよた駆くる子を追うて

枝打ちて青梅落とす夫の腕

さいたま 秋谷風舎

父の日や猫にぐち云ふ母の居て

年金の減額通知さうめん食ぶ

父の日の似顔絵のあるカレンダー

青竹を走るさうめん箸走る

父の日の広き座敷や父一人

湯浅 和

奥山粉雪

山下ユリ子

とんび舞ふ故山の風に祭笛
叶ふならと笛方望み祭連

さいたま 和田仁八郎

白扇に乗せて所望の祭唄

武蔵野を鷺づかみして夕の虹
「一口大」とメモを背負ひて小鯨かな

無人駅にぼつんとピアノ夕河鹿
犬猫にマイクロチップ走り梅雨
婚活中の黄色いポスト夏の浜
若者のいどむ酒米田植かな
独り占めの大海原やヨットの帆

和歌山 高橋満耶子

一跨ぎほどのせせらぎ虫飛ぶ

和歌山 嶋田洋子

甘き水虫袋に灯が点る

行きずりの人と語るや紫陽花寺

パイプオルガン流るる教会百合の花

泣き黒子一つ増えたり七変化

連れあひ風にほどけて夏の蝶
乳のごと双葉朝顔水あげて
門出にはひとつ真つ赤や花仙人掌
夏蝶よ水面に姿映し見よ
蠅打つて来世は鳥に産まれ来よ

大阪 飯塚智恵子

沖繩の復帰新たや夏兆す

鉢紫陽花所狭しと花卉の店

夏兆すお地藏様が笠被る

青梅や稚児の産毛光りをり

長坂を立ち漕ぎの子の汗雫

さいたま 武田重子

さいたま 岡田芳春

雨催ひじいつと伺ふ田の蛙

紫陽花や大鞠小鞠ゆれてをり

ばらの園シャッター音の切れ目なく

小花から大輪の藍七変化

雨蛙腕白坊主の手の中に

東京 柳父はる

東京 水落守伊

陸奥の山は優しく桜桃忌
若き日の憂ひの名残り桜桃忌
河鹿笛止みて瀬音の高まりぬ
形代と供に茅の輪をくぐりをり
過去形にできぬ怒りや朴の花
風少し雨後の紫陽花万朶かな
牧野庭園姫紫陽花の里帰り
へら一本水羊羹の掴まらず
角振りて行く末探る蝸牛
紛れ行く師の面影や夏帽子

緑蔭や大樹の下に椅子を置く
緑蔭と白雲映す川面かな
緑蔭に心の泉湧き出づる
緑蔭やひたすらに生き憩ひをり
緑蔭に光を受けて子等集ふ

さいたま 遠西勢津子

器量良き新じやが先づはより分けぬ
父の日や夫へ取り継ぐ子の電話
新じやがの祖先は遠き南国よ
父の日や部屋に喧嘩の傷のあり
新じやがを軍手で拭ふ畑かな

東京 飯室夏江

下駄箱のなかより顔を出す守宮
ガラス窓にはりつく守宮夜ふける
いつしゆんの憂さはらしたり梅雨の星
寝つかれず空見上ぐれば梅雨の星
梅雨の星平和を願ふ民の声

木村るみ子

入梅や炭酸割りの美酢^{みちよ}うまし
はたたがみ近し黒塚鬼女の墓
マンガロープのいかつい根元梅雨に入る
空手道場八十八夜の窓開けて
玫瑰や海辺の小屋の荒れ果てて

さいたま 田中泰子

梅雨寒や猫ひつそりと欠伸せり
梅雨寒や何を隠して茶碗蒸し
鉢の底魔王てふ名の目高をり
夜の客目高の卵持ち来る
欠け碗に目高もらひて子の帰る

東京 山中いちい

時の日や動かぬ亡母の銀時計
忘き母の思ひを送る新茶なり
また一年命を延ばす新茶かな
バラ咲かせ元木の棘は白くなり
エジプトで素麵茹でる添乗員

藤沢 小島喜代子

鶏の小首かしげる梅雨の空
草も木も空も重たき梅雨の庭
一瞬の空の青さよ梅雨晴れ間
オーデコロンの香る少女とすれ違ふ
香水やO.Lのヒールこつこつと

さいたま 染矢峯雄

父の日や慣ひの地酒猪口を積む
大小の新じやが転げ畝崩す
素揚げせし新じやが山に乾杯す
「何の日」とメールで催促父の日や
三三九度を真似しおかはり父の日や

さいたま 緒方みき子

吾子の手に義父の育てる苔の花
側道の墓に誘ふ苔の花

さいたま 鈴木藻好

暁闇や青梅落つる音らしき
初茄子雨後の葉陰に紺を増す
毒虫が色を付けたか時計草

呑む程に揺らぐ関白冷し酒

森 和子

冷酒のひと口ふあつとフルーティー

冷酒や職引く夫の笑ひ皺

嫂の細き指先冷酒酌む

待ち兼ねし明日は女子会髪洗ふ

父の顔して父の日のレストラン

高原和子

父の日の父の肩揉む子供かな

父の日も父は変はらず茶の用意

夫も子も出掛け一人の冷素麺

喉過ぐる冷素麺の旨さかな

明易しいそいそ畑へ野菜かご

作法通りくぐれて茅の輪深き礼

山峡の宿に泊まりて蛍の夜

銀ぶらや築地の鰯の腹ごなし

根力の強き十葉また生えて

森下美智枝

蝸牛見入る少女の肩に雨
静寂の弓道場や木下闇

さいたま 鈴木敦子

緑蔭や色とりどりのフラフープ
緑蔭に響くけん玉「もしもし亀よ」
緑蔭に藍染を干す児童かな

立て掛けし傘の余滴や梅雨の星

樋口元美

うたた寝や夏星べガの見つからず

壁を這ふふんばる守宮眺めをり

お出ましの動かぬ守宮すまし顔

玄関の三和土と同色守宮かな

柿の花信玄の里ゆらり行く

北出久美子

短夜や目覚めて消ゆる夢の君

何するや鬱の晴れざる皐月雨

紅の花光源氏の女たち

清張の行きつきし地の紅の花

青田風寺の法会の笙箏築

山青く麦の穂波の一軒家

見霽かす太平神社大茅の輪

土岐善磨の校歌の杜の茅の輪かな

短夜のスイス薄明デイナー席

宮代 関谷多美子

お揃ひのとても似合ひの日傘かな
梅雨の雷腕に飛び込む大型犬
ゆすら梅夫の両の手山盛りに
花豆の上手に煮えて梅雨の寒
真白なるシヤラの蕾や弟忌

鬼石 榊原聰子

夏草を泳ぐがごとし踏み入りぬ
心太にがさ甘さも一気かな
打ち水に参戦の子ら大柄杓
夕立や草木肩寄せ天仰ぐ
空蟬や風に彷徨ふ旅なかば

さいたま 福田育子

若竹や雲間の星の零れ降る
東欧の銃声止まぬ麦の秋
人氣なき島のデイゴの主張あり
鈴蘭の音を聞きたし風の森

草加 外村紀子

早苗田を行く影淡し朝のバス
青芝刈る娘庭師のヘルメット
七夕の願ひひたすら平和をと
応へたきスマホ難し髪洗ふ

横浜 山岸弘子

玉葱の小さな命軒下に
六畳の仏間明るきアマリリス
山道を登れば匂ふ麦の秋
でで虫のやつと到着小枝まで

鬼石 加藤ナヲ子

海猫や飛び立つ空の白さかな
入梅や気温血圧定まらず
五月雨や下手なピアノの音の消え
老鶯の声競ひ合ふテニスの森

さいたま 川島夕峰

梅雨星や素数の秘密句の秘密
飴ひとつ貫ひし縁や梅雨の星
月の色映して錆びぬ梔子の花
バリの夜の森の吐息や守宮鳴く

横山礼子

西日射す机上に書き置き一枚
何処よりファの音聞こえ虹の立つ
ふつさりと茂る夏木や葉の光
夕虹や淡く消えゆき黙の有り

小山敦子

せせらぎに笑ふがごとく河鹿泣く
二階にて猫も歌ふや河鹿笛
桜桃忌ただ一色の暗き道
辛抱も我慢も忘る桜桃忌

草加 持永喜夫

古宿のきしむ廊下に河鹿笛
テント泊眠りいざなふ河鹿笛
無頼派をまだ恋しくて桜桃忌
教室に深きため息太宰の忌

さいたま

竹内万美

五月晴れ空へ空へと観覧車
緑蔭を出て新しき影とゆく
風薫るシャンプーの香の首導犬
薫風やいよよ眩しく木々溢る

さいたま

古池恵里子

啼く主を語るうんちく木下闇
下闇や杉根をまたぎ笑ふひざ
風まとふ振りむく女初浴衣
下闇に観音探す奥の院

村山八千代

告白はしないと決むる西鶴忌
宝蔵寺子規を祀りぬ星月夜
そばへ降り鶴の橋きはだちぬ
観音の貰ひ泣きする霧襖

所沢 関根千恵

桜桃忌ひねもすけぶる小雨かな
川沿ひをからんころんと桜桃忌
初河鹿谷の静寂にこだまして
月影の川面に映り河鹿鳴く

鈴木香音子

木下闇動くものある池の中
夕闇や舗道を隠す大出水
鬼ごっこ子供ばかりの木下闇

さいたま

鈴木智子

髪洗ふカットも染めも自己流に
冷し酒酔うてみやうか金婚日
冷酒や当ては生姜に紀文揚
洗ひ髪鏡を前に右ひだり

落合和枝

梅雨出水谷の飛石渡らせぬ
鉄線や瑠璃に輝く女の耳
木下闇抜けて武將の廟所あり

河井育子

ゴム長の出番待ちたる出水かな
葉を返し木下闇の別世界
陰影や美に目覚たる木下闇
夏来る女の敵は紫外線

小田美智

吟醸の冷酒を比べ通となる
梅雨の星ゲリラ豪雨の去りし夜半
玻璃に透く守宮這ふかと根くらべ

糸井しるく

作品評

山本鬼之介

六月の雨に爪弾くマンドリン 篠崎紀子

日本における六月という月のイメージは、捉える人によって違いがあると思うが、一般的に先ず感じるのが、梅雨のシーズンとしての鬱陶しさであろう。もっとも近年は、世界的な気象変動が原因してか、稲の成育や真夏の渇水に役立つ梅雨時期の長雨や、猛暑に潤いをもたらす夕立が姿を消し、代りに線状降水帯による集中豪雨が日本列島を襲い、各地に甚大な被害をもたらしている。

このように、気象上の六月には良いイメージは無いが、一方で六月を代表する紫陽花・青葉・青芝・青蔦・葉柳などの花や草木から六月の清々しい季節を感じ取ることが出来る。青葉がこんもりと茂った庭に面したりリビングで木の椅子に座り、長い髪の女性がマンドリンを爪弾いている情景を思い描くと、一年の中で六月が最も美しい月であるかのように思えてくる。お洒落なピックを使ってピッキングやトレモ口の奏法を繰り返している。きらきらした音色で奏でられる透明感のある旋律が、この緑蔭にこれから素晴らしいドラマが展開

してゆくような気持ちにさせる。夢を生む六月の雨である。

ででむしに会へば八十路も童歌 清水桂子

近年、春先の庭で鶯の美声を聞くことがなく、また、梅雨時の庭で蝸牛に出会う機会が減ったことを淋しく思っている。古くから伝えられていた童唄に吉丸一昌という人が明治の末頃に手を加えたと言われている文部省唱歌「かたつむり」は、小学校で誰もが歌った思い出があると思う。蝸牛を観察していると、自然にあの歌詞が口をついて出てくる。本句の中七から下五にかけての「八十路も童歌」を、「八十路が童歌」に替えた方がよさそうな世情であり、恐らく高齢者の方がこの歌に溶けこんでいるのではないかとさえ思う。

六月の木々を映して寺の床 新井孝磨

学僧の作務によって磨き抜かれた禅寺の廊下を連想する。青葉に包まれ鬱蒼とした古刹の境内は静まりかえり、観光客も自ずと黙を守りその景観が実に見事である。磨き抜かれた姿見のように、広縁の床に静謐な木々の姿が映っている。その上を踏んでゆくのが憚られるように……。

初螢追うてひとりの弁天堂 梅澤輝翠

音楽・弁才・財福を司る女神であり、七福神の一神として

親しまれている弁天様である。古社の末社として祀られている弁天堂に灯が点る頃、近くの清流に生まれた螢を追ってきたら弁天堂に行き着いたということであろう。周囲には人が居らず、螢と水入らずの時を過ごす。

明滅はまさに螢の息づかひ 菅原真理

螢の光は、雄と雌との求愛信号であると言われていたが、それを「息遣い」に見立てたことで非凡な螢俳句が生まれた。螢の生息域の環境汚染や河川の護岸化などによって、螢の発生が減少してきた歴史があるが、近年において各地で螢復活の取組がなされているようで、螢に会える機会が増えることを期待している。

消えて知る螢の闇の深きこと 西幅公子

現代社会に於いては、かなり辺鄙な土地へ行かないかぎり夜間でも人工的なある程度の明るさがあり、なかなか真の闇を味わう機会が無い。螢の観賞は何と言っても真つ暗闇の場所がよい。螢が点す幽かな明かりと闇の深さの対比がはっきりするからである。作者が子供時代に体験した螢狩りの様子が、今あらためて再現されている。

尺を取る女性テラー 虹立ちぬ 反町 修

吾がサラリーマン時代の思い出になるが、仮縫い付きのいわゆるテラーメイドの服を着たのは、就職祝に父が近所に住む洋服職人に注文してくれた背広、結婚祝に仲人さんが注文してくれた燕尾服、三代目紗一主宰の頃に水明で注文した揃いのブレザーの三着で、永年において着た服は、吊しかせいでいざいざオーダーの背広であった。

銀座や丸の内にある英國屋のような高級な洋服店を想像させる掲句に触れて、身の引き締まる思いがした。しかも採寸するのは女性テラーであるという。糊のよく利いた真つ白なシャツを着た女性の仕立て職人にメジャーで身体各所の寸法を採られる時の気持は如何なるものか。多分男性の職人の時より緊張するのではないか。作者には嘗てその経験があるように感じる。店を出ると、雨上がりの空にくっきりと虹が出ていた。洋服の仮縫いの日が待ち遠しい。

音頭取る鳶の頭や夏座敷 染谷正信

江戸情緒を好み、巧みに俳句に取り入れる作者が、得意げに小鼻を動かしている作品である。

江戸時代の町火消の流れを汲む頭衆が集まったの祝の席かと想像する。音頭を取っているのは、多分「江戸木遣唄」であろう。火消しの半被で身を固めた一同が、鍛え上げた渋い喉を響かせて朗々と歌う木遣唄である。作者と同様に、いま

筆者の耳にもその歌声が届いている。

六月の空へ投げたるブーケトス

洪谷きいち

六月の結婚・六月の花嫁を表すジューンブライドの挙式が滞りなく行われ、チャペルから花嫁花婿が参会者の前に現れる。頃を見計らって花嫁が皆に背を向け花束を投げると、歓声が沸き花嫁の友人と思しき人が花束をキャッチする。洋式の結婚式には欠かすことのできない見せ場である。当然六月は雨の多い月なので、当日の天候が心配であるが、幸いにこの日は晴天で、花嫁が投げ上げた花束が、そのまま青空へ吸い込まれて行くように見えたかも知れない。これから始まる披露宴の盛り上がりが予知できる。

遠雷や遠くを見よと父の声

横山君夫

作者が子供時代から一人前になるまで、厳格ではあったが慈愛に満ちた父君からことあるごとに諭された言葉と思われる『遠くを見よ』である。この格言の意味は、「己の進むべき道をよく見通し人生に悔いの無いように生きよ」と言うことではないかと思うが、遠くから次第に近づいてくる雷鳴を、久しく聞く父上の諭しの言葉と感じたのである。

蝙蝠や無声映画の如く飛び

新 曆文

日本における本格的な発声映画（トーキー）のはじまりは、一九三一（昭和六）年の「マダムと女房」からと言われており、それまでは、徳川夢声・松田春翠・牧野周一などの有名な活動弁士による無声映画（サイレント）の時代であった。夏の夕暮時に音も無く不規則に飛び交う蝙蝠の姿と、作者が以前何かの折に眼にした無声映画の映像の一瞬とが結びついたのである。無声映画の特徴の一つである「ちよこちよこと早足で歩く人の姿」と蝙蝠の姿が重なったのである。

嫋やかに茅の輪を潜る異国びと

丸屋詠子

無病息災・厄除けの「名越の祓」に用いる茅萱を束ねて作った大きな輪を潜る「茅の輪潜り」である。決められた手順にそって輪を回るのが、心を籠めて丁寧に戻る人と、そうでない人と、回り方に違いが現れる。この外人の女性は、教えられた通り忠実に、しかも、歌舞伎の立女形のような姿を見せて回っている。周囲の人達も注目したことである。

川の面に羽衣めくや夏の雲

山岸久美子

上空の風に流された夏雲が川の水面に映っている。作者には羽衣伝説の天女の羽衣のように見えたのである。その羽衣は時々川面から消え、また戻ってくる。恰も覗いている者を樂ませているような、また、玩んでいるような雲の動きで

ある。豊かな感性が伝わってくる一句である。

灯籠の影に寄り添ふ苔の花 村杉清吉

苔の花は、花とは言え花ではないそうで、自ずと存在感の薄いものだと思う。筆者には、これまでにそれを見たという記憶がないが、知らず知らず眼に触れていたかも知れない。灯籠の近くで、さらにその影に寄り添うという表現が、如何にもこの花に相応しいと思う。

竹林に響く尺八半夏雨 千坂平通

時代劇映画で馴染みのある虚無僧が、半夏雨の降る竹林の中で尺八を吹いているようなイメージを受ける俳句である。作者の句意は、そのような物語的なものではなく、半夏雨が上がったのを見計らって、竹林の中で尺八の稽古をしている、というようなことかと思うが、竹林と尺八のあまりにも近すぎる関係が、あつと驚くような句意を包み込んでいるのかも知れない。

かたはらの静かな鼓動螢籠 元田亮一

「静かな鼓動」の発生源は何であろうか。二つが考えられる。その一は、蛍狩をしている男女の相手の鼓動。その二は、独り居る部屋の螢籠の螢の鼓動。明滅する蛍火を螢の鼓動と見做せば、この句の情趣が高まると思う。

南風呼ぶフラの指先腰の振り 越田栄子

ハワイの民族舞踊であるフラダンス。二〇〇六（平成十六）年に公開された映画「フラガール」によって、日本国内にフラダンス愛好者が急増したと聞いていたが、現在も、健康増進と仲間作りを目的に女性ファンが多いようだ。手や足、腰の動きで波・風・鳥・太陽などを表現する踊で、本場のハワイから情熱的な風を招き寄せるような身体の動きである。

草に寝て草を旅する蝸牛 本橋稀香

蝸牛の行動範囲はどのくらいであろうか。掲句を読んで考えてしまった。たまに蝸牛に出会うことがあっても、あの至極ゆっくりな動きに長時間付きあつたことがないので判らない。江戸時代に古びた三度笠と道中合羽で当て所のない旅を続けた無宿人や、漂泊俳人・種田山頭火を思わせる放浪の蝸牛を詠んだところに、作者の遊び心と夢心が見られる。

碁会所の窓に詰め寄る灯取虫 阿部幸代

浦和駅に近い線路際に碁会所があり、ごくたまにその前を通って中を覗くことがあるが、何か独特な雰囲気を感じる。碁会所の灯火を慕って窓に蛾が集まり、不気味な雰囲気を感じているが、中の人達は意に介せず対局に熱中している。

水琴窟

(水明集七月号鑑賞)

池田雅夫

試歩に添ひ一周の園花ぐもり

斎藤みよ

大病であったのだろう。今は快復されて自宅療養をされている。折りしも桜の季節。体調のいい日には公園に出かける。ゆつくりとした足取りにびたりと寄り添っている。その気遣いが伝わってくる。人が少ないであろう「花ぐもり」に。

つれづれに絵葉書を描く日永かな

木村るみ子

鎌倉時代末期の吉田兼好の『つれづれなるままに日暮し』を彷彿とさせる句に魅せられた。何もかもデジタル化された現代、「絵手紙」の愛好者が急増しているという。「つれづれ」の「日永」には、春になった開放感が込められている。

桜鯛ま顔で我を品定め

新井のり子

本来、「品定め」をするのは人間なのだが、本句は視点を変えて「桜鯛」が品定めをしている。そこにユーモアを感じている。大きな目玉の桜鯛は生きているかのように人間を見つめているのだ。この句の読み手も品定めをされているのでは？

若草の丘子供らのすべり台

杉浦理恵

「若草の丘」であるから、実際に「すべり台」が設置されているではなからう。ダンボールやビニール製の厚いシートなどを使って滑り降りるのだ。子供らの歓声が聞こえてくる。

春昼や午後の日課の物憂くて

鳴海順子

まさに「春愁」であろう。何となく物憂い感じが憚られ、それでも「午後の日課」をとりやめることができない。その責任感があるからこそ、「春愁」と詠まずに「春昼」としたのであろう。その心遣いこそ「物憂くて」になっている。

瀬戸内や入り日に染まる春の雲

山中いちい

「春の雲」は形をちがえてもやわらかくやさしい感じがする。瀬戸内の夕日を見たことがないが、きつと一枚の絵画を見ているようなのだろう。真っ赤に染まる雲と海面が一体化し、点在する島々がシルエットとなって浮かぶ景を想像する。

風向きを捉ふる仔馬耳聴し

森 和子

馬の仔は生まれてわずか一〜二時間で立ちあがる。おぼつかない脚を踏んばって立つ姿が眩しい。やがて親馬にくっついて野を歩く。野にも馴れ自由に駆け巡るころには、かわいらしい耳が風を捉えて、今日は雨、などと察しているのだ。

青麦や心新たに赴任地へ 榊原聰子

十一月ごろ蒔かれた麦は寒中に芽を出し、踏まれ、やがて
すくすくと葉をのびす。新任、転任の時期の年度変わりのこ
ろには「青麦」となる。新しく赴く地への期待に満ちた姿が
目に浮かぶ。きつと新たな出会いが待っているはずだ。

やはらかな風にすくすく若緑 緒方みき子

「若緑」は松の新芽のこと。常緑樹の松は、春の終わりご
ろ、枝先に新芽を出す。中には三〇センチほどにもなる。硬
い古葉とはちがいが、新芽の初々しさ軟らかさを風に託したと
ころがいい。「若緑」で止めたところもみごとである。

港湾へ下る街路や花水木 霜多光代

街路樹として親しまれている「花水木」。別名を「アメリ
カヤマボウシ」という。明治四十五年に、日本の桜のお返し
として、アメリカから贈られたものだ。「港湾」は遥か外国
へとつながり、故郷アメリカを懐かしんでいるのだろう。

雨降りて人しづかなり花の道 柳父はる

「雨降りて人しづかなり」は結論がはっきり出ているとの
指摘もあるが、「花の道」が補なっている。コロナ禍の昨
今、ましてや雨の日は人出も少ない。簡潔さが適っている。

待ち合はず二番ホームよ風薫る 安藤みえ子

「二番ホーム」は、大きな街の駅であろう。昔は駅頭で待
ち合せたり、改札口であったりしたものだ。待ち合わせてど
こかへ出かけるのだろうか。一途な思い、悦びが感じられる
のは「薫風」のせいか。「三番ホーム」でもいいのでは。

すてられぬ宝石箱の桜貝 川島夕峰

童謡を一冊読み切ったような和やかさを感じた。「桜貝」
は浅い海の波打ち際で見られる。桜の花びらのような薄桃色
の小さな貝である。もろく欠けやすいので、やはり宝石箱が
最適のようだ。ありし日の思い出ももろく忘れやすい。

瞬きの長い睫毛のソーダ水 関根千恵

さまざまな清涼飲料水があるが、中でも「ソーダ水」は人
気が高い。炭酸ソーダに果物シロップや香料を混ぜたもので
若い女性にも好まれる。ソーダ水をストローで含んだときの
仕草が窺われる。「長い睫毛や」で切ってみてはいかがか。

若草を衝立として羽繕ひ 河井育子

「衝立（ついたて）」は室内を仕切るためのもの。その衝立
に「若草」を見立てていることに感心した。「羽繕ひ」をし
ているのは小鳥にちがいない。小鳥がつややかにみえる。

網野月を選

山紫集

梔子の花の忍耐へば将棋

青木鶴城

抜歯後の浅き眠りや梔子咲く

石川理恵

くちなしや廃業近き理髪店

曲淵徹雄

梔子や母入院の夜の庭

檜鼻ことは

—以上精選

嘘ついて梔子の香のやさしけり

飛永 鼓

雨しとど花梔子の勝手口

山岸弘子

山梔子や今なほ母の部屋と呼ぶ

森 和子

無縁墓梔子の花香を放つ

山中いちい

梔子の花錆びて知る適齢期

日高道を

梔子の花セーラー服のおすましや

湯浅 和

梔子や酸素濃度の戻る朝

本橋稀香

梔子の花重さうに咲きるたり

横山君夫

くちなしの花武人埴輪を守る民

大塚茂子

梔子の白きうるはし錆いとし

横山礼子

梔子や白鳥を舞ふバレリーナ

野田静香

梔子の花修行の僧のふた呼吸

新 曆文

梔子の匂ふ庭先爺はどこ	阿部幸代	梔子の花貴夫人の背うるはしく	内田恵子
誰の家梔子の花白々と	新井孝麿	ウエディングドレス匂はず梔子の花	梅澤輝翠
くちなしや愚痴ひとつ捨て帰りをり	荒井俱子	梔子の花錆びぬ間の慕情かな	梅澤佐江
梔子や日陰に咲いてなほ白し	飯田忠男	お市の方の慕梔子の白匂ふ	大場順子
梔子の花を目当てに友が家	池田雅夫	梔子の馥郁たる香通ひ道	岡田宣子
白昼夢くちなしの花の香褪せて	石田慶子	梔子の花が好きとふ人とゐて	加藤でん治
梔子の花半生を住み古るも	井関礼子	梔子の花の錆色雨残る	木村るみ子
雨上り花梔子の匂ふ日よ	井上燈女	人恋うて今宵くちなしなほ香る	熊倉千重子
梔子の花をブーケにウエディング	井上玲子	梔子の夜まだ白き芳しく	河野はるみ
梔子の花歌が聞こゆる垣根越し	井口俊晴	純白の梔子の花深き愛	小駒さち子
梔子の花の香闇の道しるべ	上戸千津子	郷愁や梔子の花ひらくとき	越田栄子
指折りて逝き人思ふ梔子の花	宇田白鷺	梔子の花やはらりと心しむ	後藤綾子

梔子の花や未来へブーケトス	近藤徹平	くちなしの頃に別れてそれつきり	瀬戸雄二郎
梔子の花や牧水の歌想ふ	斎藤みよ	梔子の花よ昭和の艶歌聴く	染谷正信
梔子の花のむかうに園児ゆく	榊原聰子	梔子の花香に噎する幼児かな	反町 修
散歩道変へて梔子咲く小径	笹本啓子	友逝きて梔子の花の香は仄か	高島寛治
梔子の花奪はれしは唇	渋谷きいち	妹にをそはりし歌黄梔花	高橋満耶子
梔子の花みつめゐて白き雨	下川光子	梔子や白きドレスのウェディング	武田重子
梔子の香やけに広がる別れ際	菅原真理	梔子の花に翁の顔寄する	田中章嘉
激動の世に梔子の甘き畝	杉浦理恵	守護石に城子を見たり花梔子	鳥羽和風
梔子の花錆びてなほ香の残る	鈴木藻好	梔子の花を捧げて告白を	外村紀子
清方の女振りむく花くちなし	鈴木玲子	梔子咲く白秋俊子住みし家	仲田利子
梔子の香りを今に葉草園	諏訪サヨ子	遠き日を懐しき君梔子の花	南條さわゑ
梔子の花の馨りの優しさよ	関谷多美子	友訪へば梔子の花今盛り	西浦千枝子

梔子の香に湧く元氣朝万歩

西幅公子

梔子の花の香重き雨もよひ

松井由紀子

梔子の香りて咲くを知る朝

野口和子

花梔子黒板塀の街そぞろ

丸山マスマ

梔子の花や追憶果てもなし

野平美紗子

梔子の花香り初む薄暮かな

宮崎紫水

くちなしの香増やして白き夕間暮

野村美子

夕間暮れ花梔子の香る路

宮崎チアキ

写経終へ梔子の花仄明り

原田秀子

梔子の香引き連れ父帰る

村杉清吉

生垣の梔子の花真白なり

樋口元美

梔子の仄かに匂ひ寺井汲む

森川義子

門口に梔子の香のお出迎へ

福田千春

梔子の匂ふこの庭足止める

森下美智枝

梔子の紋所めく真正面

藤澤喜久

梔子仄か渡哲也を産みし町

森本早苗

くちなしの花は生き生き胸騒ぎ

古池恵里子

くちなしの香る古刹の勅使門

保坂翔太

くちなしの香や回覧に喪の知らせ

正木萬蝶

梔子の咲きて故郷糸の雨

町野広子

水明八月号山紫集覧に靖国神社のみたま祭献句の記事及び俳句を載せていただきありがとうございます。心からお礼申し上げます。

鳥羽和風

山紫集作品評

網野月を

いうことの幸せを読み取ることが出来る。「梔子の花」でも「梔子」でもなくて「山梔子」文字表記を選択したところに作者の母親像が滲み出ているようである。秀句です。

梔子の花 錆びて知る 適齡期 日高道を

座五の「適齡期」は衝撃的な言葉なのだが、それ以上に作者が花の一生を見届けようとする優しさの感じられる句になっている。秀抜です。

梔子や 酸素濃度の 戻る朝 本橋稀香

オキシメーターで毎朝計測されているのか、それとも金魚鉢の中の金魚の様子から推測しているのかは分からない。兎に角、季語と句意の意外な取り合せ句のように読めるだろう。いわゆる季語と句意が離れている、という指摘が成立する句であろうか。思い切つて作者が離れたのであるが、同時に季語「梔子の花」の本意・本情の興行きの広さを感じさせてくれている。

くちなしの花 武人埴輪を守る民 大塚茂子

七七五のリズムの句である。また取り合せの句でもある。上五を「くちなしや」とする手法もあつたのだろうか、作者は字余りを承知で「くちなしの花」と置いた。言うまでもないことだが、中七座五の句意に匹敵するものとして、「花」を加えたのである。大方の歳時記では「梔子の花」を本季語として記載し、「梔子」「山梔子」は傍題・子季語として掲載している。が本季語だからということではないのだ。座五の

嘘ついて梔子の香のやさしけり 飛永 鼓

季語「梔子の花」のイメージの多様性を巧みに把握しての作句である。「梔子の花」といえば、その強い独特な香りと花の色合い、葉の艶等が特徴として挙げられるであろうが、この句はその香りに集中している。どちらかと言えば、強い香りを放つていて、座五の「やさし」とは相反していると考えるのが通常であろう。敢えて「やさし」というのは、上五の「嘘ついて」が要因である。句の構成は、上五の接続助詞「……て」から上五の原因と中七座五の結果ということになっている。そこに必然は無く、作者の創作の偶然性が存在しているのである。ということとはどのような「嘘」であつたかが、鍵になるであろう。深刻な「嘘」に思えるが、決して自分のための「嘘」では無い様だ。

山梔子や 今なほ母の部屋と呼ぶ 森 和子

どうやら季語「梔子の花」は母親との関係性の深い花のようである。花の色合いやその香りが母親と結びついていると

「守る民」を譬えるものとしての文字通り「花」を添えたかったものであろう。

梔子や白鳥を舞ふバレリーナ 野田静香

上五に季語「梔子」を配して、且つ切れ字「……や」を以って強い詠嘆を作り出している。つまり中七座五の句意と相反するか、合致するか読み手の解釈に拠るのだが、取り合せの典型的な構成句である。ということは中七座五の句意がこの句の命なのである。「梔子」とは「白鳥を舞ふバレリーナ」のようだと解釈するのが順当な解釈であろう。強烈な輝きを感じた時、人は其処に匂いをも感じるものである。仮にそうすると梔子の香りを含めて、バレリーナに投影させていることになるだろう。視覚的に捉えているだろうか。バレリーナに来ならば視覚的に捉えるだろうか。バレリーナに嗅覚的把握を重ねることで、俳句という詩の領域に作者独自の世界を展開して成功している。

梔子の花の忍耐へぼ将棋 青木鶴城

季語「梔子の花」に取り合せる構成の句の多い中で、反対に座五の「へぼ将棋」と取り合せる形で「梔子の花」は「忍耐」をさせている。深刻な句意を選ばないで、「へぼ将棋」と躲しているところに一層に意味の深化を誘っている。

抜歯後の浅き眠りや梔子咲く 石川理恵

「抜歯後の」疼きの所為で「浅き眠り」になっている、そ

こに梔子の香りが届いている、と解釈した。浅い眠りの中で梔子の香りに気付いている訳だが、もしかしたら梔子の香りの所為で「浅き眠り」を誘っていたのかも知れない。中七の切れ字「……や」の効果に拠って、「浅き眠り」と梔子の香りの関係性に隔たりを持たせているが、詠嘆の「……や」と考えれば梔子の香との関係性がより深まるように読めるであろう。

くちなしや廃業近き理髪店 曲淵徹雄

中七の情報「廃業近き」は何処からの情報であろうか。気に入った「理髪店」は、なかなか固定しないものだが、一度行き付けになると、その理髪店へ通うことになる。そうした思いを背景に「廃業近き」という措辞を解釈すれば、慣れ親しんだ「理髪店」への思い入れを感じずにはいられない。上五の季語「くちなし」は時間の経過を背景にした懐かしさや心の陰影を反映したイメージを担保しようとする意図があるのであろう。

梔子や母入院の夜の庭 檜鼻ことは

中七から座五の「……入院の夜の庭」は、自宅ではなくて入院先の病院の庭を想定して解釈した。お母様が入院して不在の自宅の庭ではないということである。入院先の病院の庭には梔子の香りが立ち込めたのだ。落ち着かない心の在り様の中で、ふっと梔子の香りに気付いてみると、どうした訳か落ち着いた心持ちになった、ということであろう。花の香から母親との思い出が回顧されたりするものである。

大村節代 選

鼓
笛
集

風薫る八幡坂の石畳
横着な自分も自分心太
炎昼や黒鐵パンの噛みごたへ

元田亮一

豪農の深き庇や夏の庭
ライトアップに浮かぶ庭園苔茂る
白壁にワンポイントの守宮かな

岡田宣子

夕立や音量上ぐるラジオかな
せせらぎの先に祠や草茂る
炎昼や路上の伸びし枝を剪る

丸屋詠子

大空へ木木の騒めく夏の山
少年の血を踊らせる海開き
寄り添ひてそつと手つなぐ夕涼み
参道を風鈴の音の吹き抜くる
とこしへに龍神池の泉湧く
かつて山城今万緑の只中に

篠崎紀子

越田栄子

亀の子の反る首すぢに風やさし
短夜や夢の際よりバイク音
夏めくやグラスに透けるハーブティー

菅原真理

那須連山帰らぬままの青嶺かな
大黒柱迎へ打水山の神
用水の軽晃の子亀と夢のなか

杉浦理恵

野辺山の無窮の空や星涼し
あれこれや高校野球夏怒濤
盆栽の置石のごと青蛙

綿貫ひさの

暑さ飛ぶ僧正の所作御護摩焚
緑蔭にせせらぎ響く男鹿川
絵手紙の搬入急かす炎暑かな

一面の日光黄菅青空と
空中の社に天指す御柱
夕立や子猫寄り添ひ雨宿り

振花の螺旋の先に園児の眼
炎天に渾身の振りホームラン
炎天に融けてゆくよなブロンズ像

狛犬の阿の口閉ぢぬ猛暑かな
軽やかな風を起こして江戸風鈴
富士見ゆる縁に人寄る夏座敷

ハンカチを握り遠忌を修しけり
湧水に浸すサイダー祖母の家
ハンカチを白帆に見立てかくし芝

落陽の滴りあつしトマト挽ぐ
薄闇に異界の気配昼寝覚む
大の字の腹にシャツかけ昼寝かな

諏訪サヨ子

俳句ある道の駅より初筑波
花桃や相聞の碑を飾りけり
饒舌な人と別れて初時雨

佐々木史女

小駒さち子

畦道を白きバラソル付きはなれ
桃あります幟一本旧街道
秋日傘かたむけ細き切通し

山岸弘子

畑宮栄子

名を呼ぶと不機嫌さうな金魚かな
甕覗き金魚いつびき悠々と
緑蔭の縁台に駒残りをり

樋口元美

森 和子

呼ぶ声の闇に飮す蛭狩
雲の峰崩れて暗き我が庵
和布屋の主の顔に塩と砂

鈴木藻好

加藤でん治

山中いちい

☆

☆

鼓笛集作品評

大村節代

横着な自分も自分心太 元田亮一

日頃は、真面目とか誠実とか言われて、その範から出ないようにしている。しかし、心の奥底には、横着で面倒くさがり己れがいる。そんな自分も自分だと言い切る作者、開き直りともいえる心の叫びに、後押ししたくなる。喉越しの良い心太の季語がさらりとして良い。

白壁にワンポイントの守宮かな 岡田宣子

夜行性の守宮は、壁や床下に住むので、家を守るようだと家守の別名があるという。

白壁に何か貼り付いている。何かと近づく、外灯に照らされた守宮が白壁に掴まっている。その様にはっとして、しみじみと守宮を見た。

夕立や音量上ぐるラジオかな 丸屋詠子

鼓笛集巻頭（八月号）

私の好きな一句（自句自解）

村杉清吉

軽鴨の子や宮司従へ神池へ

我家の菩提樹「大宮山東光寺」の池では、ここ五年程軽鴨が産卵をし、氷川神社の池まで引越しを行います。今年には三回産卵があり、その愛くるしい姿に心がなごむとともに母鴨の行動力に感心させられます。

今年はコロナの流行に加えて、真夏日が何日も続いた日本列島。何とも苛酷な夏であった。体温を越す日照り続きの日々、やつと雨が降ったと、喜んだのも束の間、東北や北陸は大雨が降り、大変な水害に襲われた。雨音でラジオが聞こえないので、ラジオの音量を上げて、水害のニュースを聞かなくては……と。それとも聞くのは癒やしの音楽？

俳誌望見 梅澤佐江

〔紫〕 令和四年六月号 通卷九三七号

主宰 山崎十生 発行所 埼玉県川口市

昭和一六年一〇月、関口比良男が山口で創刊。「伝統は、つねに新しい」を理念に、象徴詩である俳句の本質を貫く。「月刊」

主宰詠「マッコ」一〇句より

観潮に際し腹筋鍛へをり

手加減をしない先生黄水仙

渦を見たその夜なかなか眠れない

死人生むあなたは朧元首かな

水子生むわたしは朧小町です

一句目、国内では鳴門海峡の渦潮が有名、殊に春の大潮の時は大渦が出来、これを見る為の遊覧船があるが、作者は乗船に備えて腹筋（体幹）を鍛えていると言う。並々ならぬ気合を感じる。二句目、ジムのトレーナーは見目麗しい女性、それだけに一切の下心を加える事もしないが、泣き言も言えず目標に向かって努力するのみ、「黄水仙」の季語が諧謔を誘う。三句目、愈々念願叶い観潮へ。雷鳴の様に轟き、ブラックホールの様に渦巻く大迫力、壮大な自然の神秘への畏敬と共に興奮覚め遣らず、其の夜はなかなか眠りにつけずにいる。四句目、死者を累累と増やし続けぼんやりと見えているあなたは、彼の国の大統領だなあと、強い怒りと皮肉を込め

て詠んでいる。言う迄もない不当な侵略戦争を仕掛けたロシアのプーチンに他ならない。五句目、若者の平均年収二百万円時代と言われ、生きにくく結婚も諦めざる得ず、子供を生む事も儘ならず少子化に加速している日本に於ける格差拡大の縮図であるうかと。「水子生む」の措辞が切なく、「一億総中流」の言葉が懐かしい。

龍門集 四名 各七句より

くらつかあ鳴らして春を呼びませう 渡辺まさる

春は曙エレベーターのR押す 鈴木紀子

群青がにほふ男雛の怒り肩 若林波留美

挫折など繰り返しつつ鳥雲に 森壽賀子

無門集 同人自選 二七名 各七句より

春日差し背中に受けて路を掃く 喜田礼以子

三・一ーぺりつと剥がす絆創膏 後藤宣代

そろそろか桜待合室の黙 小林邦子

山紫集 同人自選 四五名 各五句より

突き当るまでこの道を行く春野 嶋野靖子

牡丹雪触れたるものに留まりぬ 鈴木浮葉

新星集 会員 三六名 各四句より

山笑ふ一本道の村育ち 瀬山嘉子

逢ひたくて逢ひたくなくて二輪草 池田ゆふ

作品は「有季・無季・口語・破調を問わない」としており次に挙げる様な新鮮な抒情句に出会えた。

沈黙の香りが夜の帳まで 小林敏子

溜め息は大きく一日二回まで 細井美人

夕月は銀の匙春の雲すくふ 鈴木浮葉

句集喝采

近藤徹平

◆松井国史「流寓」

山河俳句会

著者略歴 昭和十六年一月東京生。同三十一年高校入学と同時に「山河」入門。小倉緑村、佐伯昭市に師事。平成十六年より同二十八年迄「山河」代表。「汐雲」等二句集既刊。

本句集の標題「流寓」の本意は放浪して他郷に住んだが、著者は東京生れ東京育ち。生涯を旅に過ごした俳聖達の上へに回帰しようとする著者の心情の顕れと想像するが如何。

梅咲くや一晝で足る一遺体
二ヶ月や勝手に動いている臓器
いつも在りいつも唐突雪の富士
真ん中に朱夏置く昭和の展開図
戦争放棄この詩的語を笑う蟬
花の野に立ち両耳がばかに暇
生かされてしまう時代や桐の花
晩夏光自分史に置く鉄パイプ

著者特有の諧謔の効いた句が光る。第一句、人はどれ程の土地が居るかを説論するトルストイの寓話に季語を幹旋。第二句、健常者は無関心な臓器に注目。第三句、矛盾する措辞を季語が納得させる。第四句、終戦を境に全てが逆転した日本を歴史の尺度で縦覧。第五句、国論を分ける課題を詩的語と喝破。第六句、視覚が聴覚を笑う。第七句、死生観の歴史の逆転を鳥瞰。第八句、ゲバルトに走った若者達を回顧。

◆栗林浩「SMALL ISSUE」

本阿弥書店

著者略歴 昭和十三年北海道生。澤好摩代表「円錐」・高野ムツオ主宰「小熊座」・今井聖主宰「街」・清水倫代表「遊牧」各同人。句集「うさぎの話」既刊。他に俳句に関する著作多数。

着膨れて立売の手に「BIG ISSUE」
水中花 環境部 分離案
東京は花なき剣山銀杏散る
集まつてみんな年寄る花筵
洩垂れのみんな離れてチューリップ
「雪の降る街」に生まれて雪嫌ひ
梅咲いて私雨の来る気配
わたくしを捜す放送秋の暮

第一句、本句集の標題の参考とした路上生活者が自立目的で立売する国際的雑誌名。第二句、著者には民間企業のエネルギー環境分野の技術開発・事業運営に携った経歴、環境担当組織を分離独立させたか。第三句、東京に剣山の取合せの新鮮さ。第四句と第五句、著者が近過去と分類する句で、年寄ると洩垂れとの対比が絶妙。第六句、諧謔極まれり。第七句、私雨は有馬、鈴鹿、箱根の山地では俄雨の呼称。第八句、戦後ラジオの聴取者から戦争で行方不明の肉親・知己の消息を問合せる投書を披露した放送があった。著者は第一線を退いてから俳句に集中した由。俳句評論まで執筆にただ脱帽。

「現代俳句カレンダー 2023」 販売のご案内

現代俳句カレンダーご注文の受付を開始します。今年も引き続き多くの会員からのご注文をお待ちしています。

◆体 裁：B4判の上下二連

◆価 格：1,200円 / 1冊（定価の2割引）

◆注 文：下記の通りお願いします。

葉書に3項目を明記する。

①注文者の住所・氏名・連絡先電話番号

②注文冊数

③受取り方法[発行所で引取・自宅又は指定先に発送]

葉書の宛先は、

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町 4-10-21

水明俳句会 カレンダー係

注文締切 10月17日(月) お早めにどうぞ!!

◆備 考：①水明俳句会より下記7名の俳句が載ります。

主宰（短冊揮毫） 網野月を 大村節代

石山かつ子 椎野美代子 大橋廸代 星野和葉

②自宅又は指定先に発送をご希望の場合は、
実費送料をご負担いただきます。

※間違い防止のため、ご注文は葉書でお願いします。葉書以外の注文はご遠慮ください。

※ご不明の点については、[総務部 日高道を]

TEL 090-2122-1223 へお問合せください。

主 宰 山本鬼之介

総務部長 日高道を

『俳句界』

八月号

特集

俳人たちの暮らした町

長谷川かな女

暮らした町

浦和
(埼玉)

山本鬼之介「水明」主宰

◎浦和を詠んだかな女の句(後注は筆者記)

面白くて傘をさすならげんげん野

(浦和市内の野原)

曼珠沙華あつまり丘をうかしけり

(浦和市内別所沼の景色)

生涯の影ある秋の天地かな

(調神社での作句)

白の上に猫が乗りけりけり年の市

(調宮公園内の年の市)

大官庁大寒に入る構へなり

(埼玉県庁周辺の風景)

「水明」の町

かな女が暮らした町は、出生から娘時代を過ごした東京の日本橋、霧余子と結婚して夫が亡くなるまで居た新宿の柏木と其処から転居して終焉の地となった埼玉県浦和市の三ヶ所であるが、本章は、俳誌「水明」を創刊し、「水明」と共に隆盛と苦難と復興の歴史を生き抜いた「浦和」を取り上げることにした。

浦和に於ける最初の人跡は、今から一万数千年前の旧石器時代の終り頃とされており、大古里遺跡を筆頭に後の世にかけて多くの遺跡や貝塚、古墳が発見され発掘されてきた。「浦和」の地名が発場したのは永正十一（一五一四）年のこと。

天正十八（一五九〇）年に徳川家康が関東に入国して大都市「江戸」が築かれ、浦和は五街道の一つである中山道の江戸から三番目の宿場として発展した。明治になって紆余曲折の末に明治四年に埼玉県が成立、浦和が県庁所在地となった。その後、県庁移転問題が数回起きたが、昭和九（一九三四）年二月十一日市制施行となり、埼玉県浦和市が誕生した。

旧浦和市には、開化天皇の創建と伝えられている調神社や奈良時代以前の創建とされている水川女体神社、平安時代の創建と見られる玉蔵院などの古社や古刹が多く、県立の浦和高校や浦和第一高女、明治二十二年に開校の高砂小学校など、歴史のある学校の存続や、昔から画家や文芸家が多く住んで

いることもあって文教都市浦和の名が高まり、今もってその人気が上昇している。また、郊外にある江戸時代の遺構・通船堀や見沼代用水も浦和の名を高めるのに一役買っている。

昭和三年九月十三日深夜に outbreak して柏木のかな女宅が全焼、同年十一月九日浦和町岸区東町四丁目（現・浦和区岸町四丁目）の家（養子・博の実家石関家の貸家）に移り住んだ。浦和駅から程近い距離であったが、当時はまだ人家が少なく、隣接する高砂小学校の校庭へ続く空地が寒々と広がっていた。昭和五年九月一日に「水明」を創刊、驚くほどの会員が集まり隆盛の時を迎えた。彼の大戰の終戦の前後一時休刊を余儀なくされたが、同二十二年五月五日「水明」が復刊。

かな女は、浦和市民や埼玉県民の教養と文化の発展に尽くした功により昭和三十八年十一月、浦和市名誉市民に推された。同三十九年五月埼玉県文化功労賞を受賞、同四十一年十一月紫綬褒章受章。同四十四年九月二十二日永眠、八十二歳。勲四等宝冠章受章。

昭和七年に省線電車（現・JR京浜東北線）が開通した後、浦和駅は県庁所在地の中で特急が停車しない唯一の駅となったが、東口の再開発に続いて実施された浦和駅の高架化工事が平成十三（二〇一三）年に完了、続いて駅ビルも完成して汚名を返上した。かな女もあの世で浦和の発展に驚いていることだろう。

水明夏行

第一日（七月二十九日）

青木鶴城

網野月を講師による午前中の研修会で文語表現と口語表現及び新旧の仮名遣いを学んだ後、三十八名が夏行に集った。第一来場の西幅公子さんの抽選により、席題が「天牛」と「展」の詠み込みの二題が決定、三句の投句を経て句会が開催された。互選による高得点は下記の結果となった。

- 一位 青木鶴城 二位 石井喜恵
- 三位 五明 昇 四位 近藤徹平
- 五位 石野和葉 六位 宮崎チアキ
- 七位 山かつ子 八位 小林京子

主宰詠

天牛の願ひは何ぞ百度石
速達しかも親展の文来し大暑
怨敵へ大天牛を差し向くる

主宰選

寝入り端髪切虫と遊ぶ夜
天牛の白残りたる闇夜かな
鉤の手に曲がる片蔭甲冑展
くろがねの蟻の展開岩跡
京劇もかくや天牛髭を振る
展望デツキ今日の別れのソーダ水
天牛はこんな虫かとのぞき込む
天牛や球児の眉の短くて
髪切虫声は覚悟の縁切寺
噴水や予測不能の展開図
風死せり絵画展への長き列
蟬の音の肌染み着く展望車
展開は思はぬ方へ夜の秋
闇青しジュラ紀の層に髪切虫
天牛や髪振り乱すフラメンコ
天牛よ天下取るならひげを振れ
灯点せば大天牛の影絵かな

天下取らむと天牛のギギと鳴く
天牛や飛べ大空へ迷ひなく
天牛の斑模様は戦鬪機
天牛のきりきり泣くを放ちやる
かみきりに女の命あげました
絵画展上野の森の風青し
カミキリの角に意志あり美形なり
天牛やかひなに深き刀疵
二科展の自画像若しサングラス

道 々 昇 道 々 喜 惠 粉 雪 月 を 静 香 万 美 卓 郎 かつ子 マスミ 京 子 和 葉 鶴 城 以上特選 かつ子 眞理子 孝 磨 徹 雄 輝 翠 道 を 久 美 子 卓 郎 節 代

展覧会の余韻片手にピアガーデン
髪切虫破れ障子の峽の宿
天牛虫修験の山に髭を振る
外厠まで十歩の闇よ天牛鳴く
見えを張る髪切虫の歩みかな
天牛や武神のごとく飛び去りぬ
進展はあきらめましました雲の峰
天牛で残念さうながき大将
絵葉書は暑中見舞のゴツホ展
悪友や義理だ義理だと天牛虫
剃髪の袈裟を追ひたる髪切虫
天牛に切らせてみたし古緑
夜深しのカードに遊ぶ髪切虫
海望む展望台に日焼けの子
天牛に鬻切らるるや鱧背者
夏帯や古代衣装の展示会
展示会角突き合はす兜虫
天牛や夫婦二人の黙破る
風渡る展望台に夏つばめ
天牛を見つめキラキラ子の眼
体の良い天牛は好き声嫌い
展望は棚田と空だけ山の駅
天牛の威嚇の音の夕まぐれ
放すまで髪切虫の放電す
緑の棚田姥捨駅の大展望
天牛や秋子よけふは近寄るな
天牛や棚田ひろがる篠ノ井線

はるみ 喜 惠 延 昭 マスミ 風 舎 京 子 粉 雪 俊 晴 月 を 徹 平 啓 子 さいち 昇 正 信 美 子 修 チアキ 静 香 多 美 子 ひ さ の 眞 理 万 美 稀 香 美 智 枝 和 葉 公 子

展開の出来ぬ閑敷油照

鶴城

第二日（七月三十一日）

石井喜恵

連日の猛暑とコロナ禍の中、夏行二日目が三十三名の出席を以て敢行された。席題は「滝」と「走」の詠込みで二句。出句までの一時間会場は緊張感のある静けさに包まれた。

主宰 詠

第三の人生祝ふ大瀑布

走るのが得手の刑事や青田道

カチンコが鳴りヒロインの行く滝の径

主宰 選

若ければあの滝にこそ打たれたし

瀧の音激しくもあり優しくも

助走なくいきなり余生さるすべり

早足でありとも蟻は走らない

滝落ちて滝ともふもの消えにけり

日輪の滝を透かせて瑠璃となす

山祇のたたなづく滝幣ゆるる

のしかり水が水押す瀧真白

待つ人へ小走りへ寄る藍浴衣

船長が水棹に示す峰の滝

小走りの藍の浴衣や吾妻下駄

耳元に死神のこゑ瀧の壺

滝音や悔は脳裏を駆け巡り

和葉

〃

〃

拓真

〃

〃

鶴城

〃

稀香

〃

大場順子

〃

昇

月

正信

道

を

姫女苑島に短かき滑走路

結願の寺の馳走や青田風

水音も馳走の一つ夏料理

走り寄る捕手の耳打ち炎天下

百メートルの岩壁分つ那智の滝

滝見茶屋パントマイムが窓を拭く

満塁の走者一掃夏の空

只管に滝に打たるる異邦人

番鳥裏見の滝をくぐりをり

小手がざす古道の彼方那智の滝

滝道を跳んで八十何のその

青海原しぶき走らせヨットかな

頭上より硫黄ほのかに湯滝落つ

大気震はす滝への道の確かなる

犯人を見つけ追走夫の夏

滝つぼの蒼さよ水も色つける

西瓜割り走り廻る水あたたず

銀河の滝石狩川の水を増す

パリ祭皇居一周完走す

穂高縦走たつせい願ひ御来光

深山の靈気束ねし滝とどろ

滝落ちて沃野うるほす信濃川

見上ぐればつし手を合はす那智の滝

走望の汗の飛び散る甲子園

滝壺のたゆたふとして藍深し

放下とや斯く凄まじき滝の水

延昭

マスミ

啓子

喜恵

以上特選

翔太

月を

道を

修

風舎

俊晴

節代

徹雄

はるみ

京子

美智枝

和

輝翠

粉雪

正信

公子

マスミ

延昭

啓子

静香

かつ子

昇

滝しぶき一息入る老夫婦

カニ滝を蟹に見ようとしつと見る

生き死にを足して迷走半夏生

滝壺の水は無傷に水の色

滝壺の音に沈思するなりシャリアピン

華厳の滝咆哮るや白き龍のごと

轟音の聞こえて久しやつと滝

鳴海順子

喜恵

令和四年度の夏行二日目の最終日は、開会

時間を一時間早くした事で、主宰の懇切なる

講評を頂くことができた。

二日間通じての成績発表

(天)小林京子

(地)五明 昇

(人)曲淵徹雄

超特選五名(石井喜恵、日高道を、網野月を、

吉川拓真、境延昭)に主宰句の色紙を、他の

特選者七名には主宰句の短冊が授与された。

一位 石井喜恵

二位 丸山マスミ

三位 境 延昭

四位 五明 昇

五位 湯浅 和

六位 笹本啓子

七位 星野和葉

八位 網野月を

コロナ陽性者急増の中、出席者全員の協力

のもと、夏行二日間盛会裡に無事終了するこ

とができた。

水明例会

第一例会（浦和）

境延昭
茂木和子 報

トリコロールのはためく茶房シャーパーベット
信楽の緑釉の皿水菓置く

形なき余生のごとしシャーパーベット

亡き母の偲ぶよすがの水菓かな

水菓舐む言ひたき事の見え見えに

余生にも青春はある美女桜

校庭に無数の余韻夏夕べ

見齋かす余部橋梁涼新た

一年余の無沙汰を詫ぶる夏見舞

会食の満足度上ぐるアイスクリーム

猿ゴリラじつと見つめる水菓子

暑氣払余談さておきまづ会費

下校の子むしやぶりつける水菓子

石垣の脇にあらはるる水菓売り

難聴の父の余暇とも鮎の川

マスマシ 延昭 治子 和葉 徹平 亮一 以上特選 喜恵 チアキ 節代 順平 亮一 稀香

第二例会（東京本所）

青木鶴城 報

含羞の色とぞ思ふアイスクリーム
言ひ出せぬままに崩るるアイスクリーム
バルコニー芝居の余酔さます風
朝稽古余韻をまとも夏袴
水菓舐め他人の動画斜交ひに

延昭 和葉 治子 マスマシ 和子

昼寝児の夢見てるらしゑくばかな
弁当は完食メはミニトマト
沈みゆく日輪湯むきトマトかな

みどり

ひつそりと時過ぎゆかん午睡かな
薄闇に異界の気配昼寝覚む
ねこ午睡横に我身を大の字に

道子 士史 いちい

起重機の首かしげる雲の峰
イヤフォンに流るるタンゴ夕端居
格子戸のカラリ開く音昼寝時

弘子 玲子 敏江 鶴城

以上特選



風音にハイッと返事し昼寝覚
熟れトマト湯剥きするりと潔し
座布団や吾子の昼寝にねこ添ひ寝
雨上り木曾路の山に虹かかる
ペランダの柵よりのぞくミニトマト
水張つて五色のトマト鮮かや
大の字の腹にシャツかけ昼寝かな
昼寝覚につこり孫と顔合はせ
あの夏の野性化したる大トマト
木洩れ日の揺るる木陰や三尺寝
エスカルゴを蝸牛と云はれ箸を置く
かぶりつく味に青春トマトかな

敏江 峰雄 則子 サカエ 利子 玲子 弘子 士史 道子 鶴城

第三例会（東京）

五明 曲淵 徹雄 昇 報

平成の町村合併水を撒く
誰が打ちし水や逢瀬の帰り道
打水の上をいなせに人力車

萬蝶 理恵

電柱の影を境に水を撒く
打水の路地のはなやぎ神楽坂
打水に江戸の風湧く佃島
滑走路飛ばない蟻が曳く片羽

——以上特選

雅夫
康世
昇

はるけしや蜜カラ放歌汗ぬぐひ
弁当包むハンカチーフは森英恵
菜園や首に掛けたる汗拭ひ
サイダーをなみなみ注ぐ江戸切子
サイダーとカルピスの恋ジャズ喫茶

——以上特選

由紀子
延昭
修
翔太
文

水を打つ光の粒子撒くやうに
打水や妻ふと母と重なりぬ
昼稽古の三味の路地裏水を打つ
慈しむいのちのありて水撒きす
水撒いて野菜直売無人とす
打水やはるかに聞こゆこんちきちん
蕩蕩と海石を舐むる夏の潮
打水の奥にはんなり京ことば

——以上特選

ハンカチや白帆に見立てかくし芸
極上のハンカチーフは膝の上
安曇野の茶屋にサイダー旅ごころ
サイダーのグラスの泡のひそひそと
ハンカチや少女の笑る顎と爪
サイダー跳ぬる記憶のかげらプチプチと
物言ふは白のハンカチ面接場
サイダーや夕日に染まるスカイデッキ

——以上特選

銀座八丁大胆になるサングラス
サングラス付けて異国の人となり
サングラスはづし優男の現るる
上高地を統ぶる威厳や大青嶺

美佐尾
はるみ
宣子
江

若松例会 (京橋)

正木萬蝶
石田慶子
報

水を打つ光の粒子撒くやうに
打水や妻ふと母と重なりぬ
昼稽古の三味の路地裏水を打つ
慈しむいのちのありて水撒きす
水撒いて野菜直売無人とす
打水やはるかに聞こゆこんちきちん
蕩蕩と海石を舐むる夏の潮
打水の奥にはんなり京ことば

——以上特選

ハンカチや白帆に見立てかくし芸
極上のハンカチーフは膝の上
安曇野の茶屋にサイダー旅ごころ
サイダーのグラスの泡のひそひそと
ハンカチや少女の笑る顎と爪
サイダー跳ぬる記憶のかげらプチプチと
物言ふは白のハンカチ面接場
サイダーや夕日に染まるスカイデッキ

——以上特選

パリ祭や極彩色にバリ汚れ
明治屋の塩キャラメルやパリー祭
ピストロの梯子愉しむ巴里祭
疎覚えのフランス国歌巴里祭
軽便鉄道乗りて訪ぬる夏の山
明易や三線流れ鳥時間
ふらんす堂の句集小脇にパリー祭
炎帝を乗せ軽トラの唸り声

ひろこ
はるみ
佐江
マスミ
俊晴
紀子
京子
萬蝶

第四例会 (浦和)

境 延昭
石井喜恵 報

第五例会 (浦和)

梅澤佐江
河野はるみ 報

サイダーの泡に透ける青山河
ハンカチに畳む夕日のエーゲ海
ハンカチを握り遠忌を修しけり
ハンカチを握りオペラの大団円
ハンカチのなべて真白し慰霊祭
乾杯のサイダー風の通る椅子
ハンカチを花に蝶にと手品師は
サイダーのシュワット青春かけのぼる
白ハンカチ干され帆となる青空に

——以上特選

夏山も天守も遠く青空し
こころざし同じ人あて夏の山
夏の間樹々の息吹に身をほぐす
笑顔の奥の涙目隠すサングラス
満天の星降るホテル夏の山
颯爽と闊歩してみむサングラス
サングラスはづして常の厨妻
ふるさとのかの日を想ふ夏の山
夏山を強力確と登り行く

——以上特選

シャンパンのボトルと財布パリー祭
巴里祭や銀座和光で待ち合はせ
雲海抜けし軽トラックや山畑
マスクの世仮面擬きに巴里祭
マカロンの水色が好きパリー祭
露地裏に風鈴売りの軽き声
乙女らの美しき鎖骨よパリー祭
巴里祭や習得できぬフランス語
ソムリエはアランドロン似巴里祭
明治生れの父の六尺パリー祭

以上特選
鶴城
俊晴
理恵
倭子
千春
京子
佐江
紀子
慶子
はるみ

カマンベールにチリのワインや巴里祭
軽業師反る白南風の遊園地
氣に掛かる従姉のピアスバ里祭
マスミ
ひろこ
萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

ゴンドラで越ゆ国境雲の峰
水槽の金魚巧みにひるがへり
雑草の飛び石呑むや梅雨半は
天空も遊びせむとや二重虹
夏バテもせず歌詠み将棋指すA I
涼風や現地講師は石斧手に
指先に阿吽の呼吸蟬捕ふ
友訪へば庭一面の鹿の子百合
石包丁のままごと遊び小判草
大夕立洗ひあげたる石畳
山里の校舎にかかる虹の橋
取沙汰の茶房の窓に青葡萄
玲子
礼子
千津子
ゆら女
洋子
和子
道子
千枝子
千世子
満耶子
さわゑ
早苗

昔話あれこれ 19

安康天皇。大日下王を殺害

軽皇子が亡くなり、実弟の穴穗皇子が皇位を継承した。第二十代安康天皇である。

安康天皇は同母弟の大長谷の王子（後の雄略天皇）の後として、仁徳天皇の王子の一人の大日下の王の同母妹、若日下部命をと考え、使者として根の臣を遣わした。

大日下王は大層喜び、「帝の思召すまに妹を奉りましょう。」と返事をした。言葉だけではと、妹からの贈り物として押木の玉鬘（木の枝の形をした玉飾のある冠）を根の臣に持たせて奉った。

根の臣はその贈り物の玉鬘を着服し、「大日下王は、勅命を受けず、我が妹は同族の者の后になんかするものか。と怒っておいででした。」と事実を曲げて報告した。それを信じた帝は大いに怒り、大日下王を殺し、その妻長田の女郎女を奪って自分の后とした。

目弱王、天皇を殺害

この事件の後、安康天皇は、夢のお告げを受けるべき神聖な神床で昼寝をしていた。目を覚ました帝は、后（元、大日下王の后）に「何か心配なことがあるか。」と尋ねた。后は「天皇様のご寵愛を受けて何の心配もございません。」と答えた。

后には先夫大日下王との間の子目弱王がいた。この時七歳で神殿の下で遊んでいた。安康天皇はそれを知らず、「お前の子が成人した時に私が大日下王を殺したことを知ったら、私に反逆するのではないかと心配なのだ。」と言った。

神殿の下ですっかり話を聞いた目弱王は、眠っている天皇の首を傍らの太刀で斬り殺してしまい、都夫良意富美の家に逃げ込んだ。

安康天皇は宝算は五十六歳である。

（つづく 丸山マスミ）

各地句会



水明鬼石句会 (鬼石)

陽に干すや亡母の仕立ての藍浴衣
色づいて鳥も集り枇杷実る
上州に武州育ちの雷が来る
喜雨降つて一夜で伸びた野菜かな
朝の虹うまくいきそな予感する

和子 ナヲ子 紀子 洋子 聡子

俳句の手ほどき (岩槻)

角番の大関二人合歡の花
角が取れ人生八十カンカン帽
四角から部屋狭くなる暑さかな
頬撫つる真つ新の風夏の朝
追ふ白帆逃げきる白帆雲の峰
石段を滝のごとくに雨流る
街角や探す真昼の片かげり
蟬時雨後れ毛ひかる巫女溜
斥候の蟻の一匹孤高なり

延昭 倭子 ます美 佐江 水尾 義子 徹平 翔太 忠男

夏の山コーヒーに溶く角砂糖
反骨の師の訃報知る朝曇り
角打ちの女将ゆるりと古团扇
夕焼の北の大地の一直線
遠のきし山車のにぎはひ角曲がる
夏料理神妙にして角隠し

新樹の会 (浦和)

噴水の止んで生まるる沼の色
御神輿に命吹き込む若頭
噴水のトレビの広場コイン投げ
髪洗ふ居間に懸けたる般若面
噴水や揺るる小舟のSOS
夏終る若大将は今何処
若い衆の禪きりり夏太鼓

徹雄 清吉 平通 正信 道修 鶴城

若狭水明会 (若狭)

青梅の路に湖風君恋し
過疎といふ響き悲しや著我の花
暮れなづむ杉の林や著我の花
戦国の城跡惚ぶしやがの花
夏布団軽いが好しとせぬ男
夏布団ピンクと青の色違ひ
母の忌や供華に添へたる著我の花
著我の花これより先は車止
嬰兒の甘き匂ひや夏布団

寛久 鼓 白鷺 初花 冬至 郁子 保人 和風 ことは

水明熊谷句会 (熊谷)

暑気払からむ男へ決め科白
炎天下シーソーゲームの決勝戦
向日葵に母国を憂ふバレイリーナ
花火師のお国訛の闇走る
手花火や闇に父母あるやうな
轆轤挽く工房の窓日輪草

雛の会 (浦和)

少年に酸っぱき野性トマト挽ぐ
赤茄子の色をいたたく朝餉かな
小江戸にて菓子屋横丁かき氷
片蔭や足ふん張つて試歩一步
青くさき少女の頃や蕃茄熟る

喜恵 子アキ 輝翠 燈女 佐江

青葉の会 (浦和)

幼の掌開けば飛びぬ天道虫
葉の先で迷ひなく飛ぶ天道虫
大工の筆の築百年の納屋に蜘蛛
パラシュートめく羽で飛び立つ天道虫
遠雷やひつそり閑の納骨堂
天道虫逃げて少女はまた独り
てんとつむし帽子に止まりブローチに
天道虫に触れず眺むる都会の子
二の腕をこそばゆく蹴り天道虫

美紗子 真理 美智枝 公子 美子 啓子 洋子 和子 輝翠

徹平 正行 秀子 燈女 栄子 茂子

さざきサークル (浦和)

虹消えて現に返る三保の浜
銅鑼の音を残し出船が虹くぐる
虹立つや風車の叫ぶ国境

出目金や尾ひれの遊び競ひあふ
金魚すくひし子も親となり金魚飼ふ
幼子と金魚すくひの熱き母

戦勝の雲雀が原の虹のあと
山跨ぐ虹をくぐりてハイウェイ

阜月の会 (浦和)

雨に滲むお祓ひの声海開き
秋近し孫の華燭の招待状

海開き雄叫びあげて突進す
遊心を動かしたるや海開き
状差しに亡き人の文夜の秋
犬の餌少し減らして夏の朝
サイダーの力なき泡別れの夜
卓囲む老人たちの海開き

りんどう俳句会 (浦和)

願かけて茅の輪くぐりし人の波
緑蔭や首里城のなき石畳
土壁の木舞顔出す暑さかな
緑蔭をはみ出してをり停留所

昇和

啓子
和枝
喜代子
かつ子
タイ

光代
珪子
順子
紀子
静香
孝麿
暦文
さいち

サヨ子
紀子
徹雄
寛治

緑蔭や「湖畔の宿」を歌ふ君
緑蔭に静穏よそふ大使館
波笑ふ踊る熱砂の赤ふどし

五右衛門を偲んで耐ふる暑さかな
容赦なき照り返しの暑乳母車
アスファルト大波小波の炎暑かな
緑蔭に七賢となり囲碁を打つ

水明小川句会 (小川)

刈草の青き匂ひや夏の月
音きえし酷暑の町の死の匂ひ
梅雨明けて我が物顔の草の波
草草で結ぶ礼状月涼し

あゆみの会 (浦和)

憂きことはさらりと流し心太
夕涼み和紙のシェードの薄明り
和三盆探し巡るや夏帽子
心太一人で食ぶる田舎茶屋
遠のきしものに昭和と金魚売
老和尚白眉の端に汗雫

蛸の会 (浦和)

盥よりピチピチの音土用かな
夕顔の楚々と迎へる仮住ひ

翔太
卓郎
弘夫
君夫
正信
治子
利子
順子

綾子
みや
きよ子
栄子

啓子
和子
重子
山遊
倶子
藻好

元美
風舎

陰性の証明書手の帰省かな
一口で力感じる土用餅
御利益を信じて土用うなぎかな
残業の帰路の夕顔明りかな
白波の立つ瀬戸内の土用かな
夕顔や夢二の絵筆艶めきて
夫婦とは陰に日向に梅雨夕焼
夕顔や小夜の帳の自己主張
闇深し夕顔ひそと灯りをり

野菊の会 (与野)

鳩は翔ち人はハンカチ振る別れ
黒猫の標的となる金魚
早朝のメトロ乗りつき蓮を見に
源流までたどりつきたく桃する
猫の目の瑠璃にかがやく木下闇
しばらくは猫と分け合ふ片蔭り

りそな俳句会 (浦和)

引率の先生色黒夏帽子
明滅は鼓動に似たり螢の夜
やはらかに握る手漏るる螢の火
会ふよりも逢ふの似合ひの螢の夜
螢火を追うて鞍馬の木の根道
夏帽子いつもとちがふ散策路
峡十戸螢の闇に沈みゆく

礼子
さち子
ひさの
朝香
るみ子
しる子
月を
鶴城
宣子

美代子
和子
清子
まな
知子
光子

建治郎
寛治
久美子
暦文
道を
雅夫
マスミ

マスミ

和歌山水明句会 (和歌山)

清流のおもむき父の夏袴

天道虫母の形見の五つ紋

石のネックレス効き目の失せて夏旺ん

虹の彩思ひつ切りの深呼吸

夕虹や触れないやうにこの話題

炎天に石仏顔を白くする

雨上がり樹木の葉つばに虹宿る

荒神興石段うねりはじめたり

櫻 蔭 句 会 (浦和)

太陽と同じ顔してダリヤ咲く

戦なき地なりぼんぼんダリヤ咲く

畑野菜底なしに吸ふ夏の雨

ポンポンダリヤ根締め挿して華やぎぬ

鳴虫山雲かかたりや夏の雨

太陽に祈るが如きダリヤかな

祖父好むダリヤ庭より剪り供ふ

夏の雨上がりて響く解体音

湿原の木道ふたり夏の雨

ダリヤ咲く浜の民宿朝餉とき

繭 の 会 (浦和)

カフェオレのストロー二本初浴衣

昼さがり切子の皿に枇杷ふたつ

宿浴衣笑顔で揃ふ同級生

酔ふほどに胸のはだくる宿浴衣

下駄履きの外湯巡りや借浴衣

誰かしら今どき浴衣遠会釈

浴衣着てうしろ姿に自己満足

捨てられぬ小さき浴衣吾子の着し

熟れ枇杷の主座に並びし果実棚

ガリヴァーの小人国や台風来

身の丈に余る浴衣や秘境の湯

着せられてどの子も可愛初浴衣

山 茶 花 (浦和)

打ち水や赤き蹴出しの若女将

夏木立首相がなくなる木蔭かな

打ち水や夕餉ととのへ夫を待つ

夏木立本読む青年独り掛け

夏木立べール靡かせ修道女

襦 の 会 (浦和)

ふはふはり魔女を装ふ黒揚羽

夏の蝶舞ひ下りたるはグラヴァー邸

高く低く番の揚羽もつれ合ひ

高々と飛ぶ夏蝶の孤影かな

ビール酌む集ひの下座のなかりけり

夏蝶のおおむらさきやゆらり飛ぶ

夏蝶や母の記憶の玉手箱

トエ

正信

風舎

珪子

夕峰

粉雪

さよ子

月を

鶴城

小京子

マスミ

清一

美江子

光子

綾子

千重子

敦子

妙子

朋子

裕志

彰二

克之

ゆらゆらと影濃き昼の揚羽蝶

みかんの木の香気に誘はれ揚羽蝶

一杯のビールにはつと風呂上り

夏蝶の番ひ上下にゆれ飛びぬ

ゴーストタウン独り芝居の黒揚羽

鶴川山百合句会 (町田)

紫陽花が好きだつた日嫌ひになつた日

甚平着て大軟骨魚を見てあたり

父の日や阪神轟頂の懲りない男

夏服を着て母小さくなりたるよ

白服や声裏返る中学生

博識の頭にありしバナナ帽

夏服の少女の胸は育ちゆく

鶴川に掛かりたる虹二重三重

はきはきと告ぐ夏服の運転士

より高くより高く飛べ夏の蝶

白服の鎖骨の浅き窪みかな

水明漣つくし句会 (大阪)

活気づく土用太郎魚の棚

残されしサンダルひとつ土用波

蛸踊る広告映ゆる半夏生

土用餅食ふれば亡母の笑ひ声

紫陽花と共に打たれて雨の道

愛染堂そめて溢るる凌霄花

富子

文子

西井

亮子

治子

雄二郎

月を

喜久

史代

広子

由美子

千春

萬蝶

理恵

美千子

玲子

人美

きりり

美令

洋子

智恵子

ゆら女

芽吹句会 (浦和)

半夏雨緑にけぶる千枚田

オペラはね余韻を胸に半夏雨

黒紫は守りか攻めか立葵

銭葵奥の旧家を守るやうに

知らぬ顔されて虚しきサングラス

石垣沿ひに一雨待つや立葵

半夏雨昼は音なく夜ざあざあ

師の句碑に半夏の雨の降るばかり

光が丘俳句教師 (東京)

屋台店破れ団扇の焦げ加減

旅の荷に土地の絵団扇加へけり

理科室の骸骨の目に西日さす

湯上がりの子らへ大きく団扇風

ミモザの会 (横浜)

含羞草飽かずに触るる吾子のあて

金魚すくひ姉より多く自慢顔

三界の何処を吹くや青嵐

きゆつきゆつときやべつ手に取る道の駅

夕空の虹や明日の旅は吉

夏服や狭き部屋の音合せ

水打ちて吉原の昼真白なり

頂に積まるる石や夏の雲

修

玲子

ひろこ

千重子

正子

チアキ

富子

道を

はる

康子

典子

理恵

栄子

由美子

史代

慶子

亜弥子

玲子

萬蝶

千春

水明松本句会 (松本)

夕焼や曇に残る陽の匂ひ

猛暑日や湿つたマスク投げ捨てる

動くたび額こぼるる汗たたり

遠き日の戦火さびしむ大夕焼

野ばらの会 (浦和)

庭園に万の宝石夏の露

鮮やかに着飾り金魚掘割に

恋心あるやも知れぬ金魚かな

とりどりの金魚の踊る大水槽

小石積み川辺に遊ぶ夏野菜

芙蓉句会 (浦和)

不揃ひの湯飲みにそそぐ祭酒

「久し振り」痴呆の友の汗拭ふ

樹を祀り石を祀りて里祭

ひそやかに黒人霊歌巴里祭り

久女の句鑑賞したり栗の花

祭り旗翻り裾押さへつつ

復興の町を練り行く山車一台

若鮎句会 (浦和)

幾つかの罪よみがへる青蜥蜴

迷ひ無き空の青さや梅雨明るる

陽子

マリス

玲子

寿子

夏江

茂子

秀子

栄子

みき子

正子

道子

税子

仁

ともこ

文子

美子

亮一

芳春

指先のためらひ見抜く蜥蜴かな

梅雨明や一粒減りし処方箋

孫の目を驚嘆に変へ瑠璃蜥蜴

君逝きて一人佇む夏座敷

墓のうらに廻る蜥蜴が戻らない

孫の服剥ひでは洗ふ梅雨晴間

割り箸の杉の柁目や梅雨あがる

花嫁と進むロードや梅雨の明

梅雨明けや土の呼吸を足裏に

たかな俳句会 (川口)

万雷の拍手華やく夏舞台

やはらかに日傘影さす乳母車

炎昼をちよつと隣家へ手庇で

行きあうて傾けあうて日傘かな

炎昼の地熱の火照り纏ひつく

墓道の手桶の水や白日傘

ジーンズの日傘の人と京をゆく

夕立や万世橋のカフェ灯る

花衣の会 (浦和)

帰省せり車窓を過る山いくつ

行間に心酔はする夏の宵

ふるさとへ一本道や虫の声

夕立でメチャクチャになる村芝居

夕暮に螻蛄が鳴き出す道のはた

稀香

さなえ

万美

香音子

拓真

悦子

月を

鶴城

喜夫

久美子

のり子

小麦

勢津子

義子

鶴城

水尾

静香

みよ

みち

峯雄

治

章嘉

神戸大池句会 (神戸)

虹立てり友の退院祝ふかに
夕立中走れば猫に先越され
客席は向日葵畑舞台袖

円卓の会 (浦和)

日盛りの一本道を選びけり
卯の花や百寿の母の幼顔
人影に添ふごとをりぬ通し鴨
初投票こむるペン先日日草
日盛の電信柱すでに入
百面相の五百羅漢や日の盛
波乗や天国地獄往来す
大声の九九の帰宅路通し鴨
コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

片蔭に昼を商ふキッチンカー
金継ぎの皿がもてなす夏料理
小悪魔が似合の女優毛虫焼く
西陣に機織る音や古簾
片蔭に話上手な人とをり
青簾今宵は窓を開けしまま
蠟燭の静かに揺るる簾越し
ふうらんぶらん毛虫の垂るる糸の先
鉤の手に辿る城下の片蔭り

玲子
千津子
早苗

亮一
道香
静香
輝翠
月太
翔太
鶴城

延昭
美枝子
早都子
健司
俱子
俊晴
淑子
まさ子
昇

めだか句会 (浦和)

白杖のコツコツ過ぎて雲の峰
ひまはりや猫背に曲がる日差かな
同じ本また手に取りて夏座敷
向日葵や踏み出す友の初舞台
雲の峰怒り肩なる父悠か
もくもくがワクワクさせる雲の峰
一面のひまはり畑らの声
空青し向日葵の黄が水平線
向日葵を日傘にしたい束にして
風に乗りお囃子届く雲の峰
向日葵や不変の姿遅しく
わいわいと本家に集ふ夏の夕
ハレーの心臓見たり雲の峰
ひまはりや褐色肌の女優の目

柿の木塾 (浦和)

夾竹桃戦のうはさなほ紅く
餓鬼大将の面影然り泥鰌鍋
鍵いらぬ山家の暮し夾竹桃
泥鰌鍋茶屋に小さな隠し部屋
胡坐かきお一人様の泥鰌鍋
暮るる橋鉄の匂ひや夾竹桃
夾竹桃燃ゆ渋滞の高速道
美しく老ゆる葉よ泥鰌鍋

十三子
謙一
和幸
八千代
育子
美智
宏智
芳朗
夏美
知子
忠夫
はるみ
月を
鶴城

和葉
昇
節代
かつ子
俊晴
水尾
恵子
和子

珊瑚の会 (浦和)

かたつむり重荷になりしマイホーム
まひまひの通りしあとの筋光る
でで虫やお前も時代遅れ組
子より先渋谷に着きてひからかさ
忘れたき心の内を黒日傘
交差点男もすなる日傘かな
川風や小舟に揺るる白日傘
退屈なぞ吾に縁無しかたつむり
野の景となりて日傘の速さかる
銅鑼の音や岸壁に立つ白日傘
「夕やけどんだん」ゆつくりと行く白日傘

恵子
史代
和子
広子
和葉
かつ子
喜恵
水尾
昇
節代

りんどう忌のご案内

- 【日 時】 2022年9月27日（火） 午前11時受付
【会 場】 浦和駅東口 パルコ9階第15集会室
【投句締切】 午前11時45分（※時間が変更になっています）
【兼 題 等】 2句 兼題：「りんどう忌・かな女の忌」、および「秋の水」
【会 費】 1,000円（昼食はありません、飲み物は各自で持参してください）
【申し込み】 9月20日（火）までに巻末添付の申込書に会費を添えて発行所総務部へお申し込みください

※会場はコロナ感染症対策のため申し込みの無い方の入場は出来ません。
なお、状況によっては、内容を変更する場合があります。

◎今年（令和4年1月～12月）に喜寿（77歳）および米寿（88歳）を迎えられる方でりんどう忌参加者に記念品を贈呈します。申込時に自己申告してください。

事 業 部

第6回水明塾のご案内

- 【と き】 2022年11月3日（木曜日・文化の日）
午前の部（水明全誌友・同人・季音同人対象）
10：00～12：00（9：30受付）
午後の部（水明集作家対象）
13：30～16：00（13：00受付）

【と ころ】 浦和駅東口 パルコ10階第14集会室
申込み等の詳細については、10月号にてご案内します。

※午前の部は後藤章講師を招聘しての講演会、午後の部は全句講評講座。

事 業 部

風 声

○現代俳句七月号——「現代俳句年鑑2022を読む」欄
鈴木きみえ氏の感銘十句抄に

時雨忌や漁港に立てばスパイめく

菊池ひろこ

○現代俳句七月号——「現代俳句の風」欄

殿様は「目黒」「恵比寿」にビール樽

菊池ひろこ

風すこし雨の匂いや夏あざみ

岡野順子

仏壇に水なみなみと終戦日

大塚茂子

對話するロスコ・ルームや夏木立

小駒さち子

黒南風や高浪を衝く巡視船

五明 昇

螢火やピアスホールに飾りたき

本橋稀香

○天塚（宮谷昌代主宰）七月号——「珠玉一句」欄

春の雲動かぬままに夜の空

鬼之介

○くちら（中尾公彦主宰）七月号——「受贈俳誌美術館」欄

山は力を河は情けを愛鳥日

鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）七月号——「受贈俳誌紹介」欄

彼の日のやうに心ときめく春の川

鬼之介

○太陽（吉原文音主宰）七月号——「受贈誌御礼」欄

花冷やオート・クチュール試着室

鬼之介

○玉梓（名村早智子主宰）七八月号——「他誌拝見」欄

出世頭をかこむ宴よ初桜

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）七月号——「諸家近詠」欄

番台は昭和の華よ春灯

鬼之介

○白鳥（高松文月主宰）七月号——「受贈俳誌より」

花冷やオート・クチュール試着室

鬼之介

○山彦（河村正浩主宰）七月号——「諸家近詠」欄

出世頭をかこむ宴よ初桜

鬼之介

○苜（山本一步主宰）七月号——「受贈誌の一句」欄

紅梅や遅れて歩く妻を待つ

渋谷さいち

○くちら（中尾公彦主宰）七月号——「受贈句集ご紹介」欄

五明昇氏の句集「旅信」から自選十句

五明 昇

白魚の軍艦巻にある平和

「百草丸」の古き看板燕来る

湯上がりの天使真中にこどもの日

ケルン積む男に傾ぐ稚児車

木曾節を薬味に峽の走り蕎麦

気張らぬと決めたる余生草の花

秋燈下坊主めくりの膝と膝

飛石は着物の歩幅初しぐれ

板長が絵皿に咲かす河豚の花

風花や富士を遠見の一万歩

○白鳥（高松文月主宰）——「句集紹介」欄

櫂の火やいぶりがつこの噛み心地

五明 昇

古き良き夢路に遊ぶ大朝寝

ご破算で始める余生心太
旅そぞろ踊る阿呆になりに行く

檜立てて城垣登る蝸牛

一閃に大河を統ぶる初燕

花は五分酒はほろ酔ひ梅見坂

西日呑み影絵となりし佐渡島

春泥へ鼻息荒き三歳馬

砂浜は人恋ふところ桜貝

○沖（能村研三主宰）七月号——「沖の沖」欄

夏瘦も知らず戦後を直走り

○駒草（西山睦主宰）七月号——「新着俳句の本棚」欄

叡山の影の余白に浮寝鳥

（日高道を抄出）

水明発展基金御礼（敬称略）

—令和四年七月三十一日現在—

井上燈女	5	口	池田珪子	3	口
波多野寿子	10	口	丸山マスマ	5	口
佐々木典子	15	口	石山かつ子	30	口
笹本啓子	5	口	永野史代	1.5	口
岡田宣子	10	口	山岸久美子	2	口
山田美佐尾	5	口	鈴木康世	0.5	口
近藤徹平	0.5	口	上戸千津子	6.5	口

全国大会より

武田重子	2	口	小倉倭子	1.5	口
俳誌鳥羽谷	20	口	境延昭	1	口
山本鬼之介	3	口	下川光子	1	口
大村節代	3	口	鈴木玲子	2	口
青木鶴城	2	口	染谷正信	10	口
荒井俱子	2	口	田中章嘉	5	口
飯田忠男	1	口	西幅公子	3	口
飯室夏江	2	口	野田静香	2	口
石川理恵	3	口	原田秀子	10	口
石田慶子	2	口	日高道を	5	口
石井喜恵	2	口	日吉亜弥子	3	口
井口俊晴	10	口	保坂翔太	1	口
梅澤輝翠	3	口	星野和葉	1	口
大場順子	2	口	曲淵徹雄	5	口
大塚茂子	2	口	町野広子	1	口
岡田宣子	1	口	丸山マスマ	2	口
緒方みき子	2	口	宮崎チアキ	2	口
奥山粉雪	1	口	茂木和子	2	口
河野はるみ	3	口	元田亮一	2	口
越田栄子	2	口	本橋稀香	1	口
小林京子	1	口	森川義子	1	口
五明昇	3	口	矢作水尾	1	口
近藤徹平	1	口	柚木治子	5	口

令和四年夏行より

井上燈女
後記朝香
匿名

25 5 5

□□□

永野史代
森山洋子
橋本京子

10 12 5

□□□

青木鶴城
曲淵徹雄
反町修
笹本啓子
西幅公子
河野はるみ
野田静香
日高道を

2 2 2 1 1 2 3 2

□□□□□□□□

染谷正信
保坂翔太
西幅公子
河野はるみ
大場順子
本橋稀香
新曆文
匿名

2 2 1 1 1 1 1 1

□□□□□□□□

合計
326.5
□

大特集

結社主宰 102人競詠

「好きな食べ物を詠む」

俳壇

10月号

9月14日発売
定価900円(税込)

巻頭エッセイ
坪内稔典

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句「第Ⅲ期」：佐怒賀正美・武藤紀子

色の歳時記……………恩田侑布子

俳句文法 ところが問題、そこがポイント……………井上泰至

俳句史を見直す……………秋尾敏

江戸俳諧博物誌……………鈴木太郎

十二月添削教室……………小林貴子

いきもの歳時記……………角谷昌子

ものがたりのある俳句……………四ッ谷龍

先人のことば……………対中いずみ

連載

俳句と随想12か月

河原地英武・長島衣伊子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

後記

今年の夏は、猛暑、酷暑、極暑でした。正に生きとし生ける物全てが、息を潜めてじっと耐えた日々でした。その上、コロナも加わって、本当に大変な夏でした。立秋になり、これで朝夕はちよつと涼しい風がと期待しましたが、日暮れになっても熱風ばかり、処暑になっても涼しくなりません。しかし、九月の声を聞くと、雲に変化が見られるようになり、ほつとする日も現れはじめました。けれども九月は台風シーズン、なかなか良い季節は少ないですね。今月号は全国大会の特集号です。まず表紙裏は、主宰と受賞された皆様のお喜びの写真です。

また、大会の折に主宰から、天・地・人、特選、秀逸句の発表、講評を頂きました。本号では、当日発表頂けなかった佳作まで含めて入選句を全て掲載しました。

そして大会終了後は、来賓の方をお迎えして、延び延びにやっていました九十周年祝賀会を行いました。井口俊晴氏が大会、祝賀会を詳しくご報告下さいました。ただ残念なのは、コロナの蔓延により参加を断念された方がいらつしやつた事です。早く安心して全国大会に参加出来る日が来ます様にと、心から思います。

「第十七水明抄」は総務部の皆様に、原稿や代金を集めたり、色々ご協力を頂き、百六十余名のご参加を頂きました。

すでに、一部は原稿のチェックをしたり、あいうえお順に並べたりして印刷所へ出稿しました。

「水明」の合間を見ての作業です。から「水明」九月号が終わつたり、また「水明抄」の作業にかかります。井口俊晴氏を長に迎えて、編集部一同頑張ります。

「第十七水明抄」は十一月発刊の予定です。どうぞ皆様、楽しみみにお待ち下さいませ。

(節代)

今月のはてな？

水分(みくまり)

海紅豆(かいこうず) デイゴの俗称

蕃茄(トマト)

短鶏(ちやば)

土歴青(どれきせい) アスファルト)

便巧(べんこう)

放下(ほうげ)

螻蛄(けら・おけら)

水明

令和四年九月号

通巻一一〇四号

令和四年九月一日発行

発行所 水明俳句会

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町四一〇二二

電話 048-822-1474

ホームページ 「水明俳句会」で検索

水明発行所受付時間

(048-822-4741)

曜日：(月・水・金)

時間：12時半～午後4時半

(火・木・土・日・祭日は休み)

水明の行事と重なった時は休み

(上記の時間には係がおりますので、

ご用の方は 時間内にお願ひします。)

誌代 半年分 六、〇〇〇円

一年分 一二、〇〇〇円

同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円

季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円

振替〇〇一七〇一〇一九三三九三

発行人 山本 鬼之介

印刷所 中央美版

17 16 20 21 26 52 85 92 頁

令和4年

「りんどう忌」参加申込書

〈申込締切 9月20日(火)〉

研修会 9月27日(火)	会費 ¥1,000円	出席します
--------------	------------	-------

※「出席します」を○で囲んでください。

※受付時間・投句締切時間が変更になっています。ご確認ください。

◆喜寿(77歳)および米寿(88歳)を迎えられる方は自己申告してください。

<input type="checkbox"/> 喜寿を迎えます	<input type="checkbox"/> 米寿を迎えます
----------------------------------	----------------------------------

※「喜寿を迎えます」「米寿を迎えます」を○で囲んでください。

上記参加費を添えて申し込みます。

2022年9月 日

住所	〒		
氏名		電話	()

(申込書送付先：〒330-0064 さいたま市浦和区岸町4-10-21)
水明俳句会

山紫集

十二月号 九月二十五日締切

氏名(俳号)

九月の兼題 「秋の蚊」 (傍題可)

投句対象者 同人及び季音同人「花欄」「月欄」

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

※最上部の枠から間を開けずに楷書でお書きください。

(注意) この用紙以外は使用しないこと。事情により本用紙を

使用できない時は、本紙同様の大きさのものを作って

使用して下さい。

旧仮名づかい使用。送付には一重封筒をご使用下さい。

住所

氏名

年齢

水 明 通 信

通 信 欄
(近況・感想など)自由に書き下さい

送り先 千三三〇・〇〇六四 さいたま市浦和区岸町四十一番二
水 明 発 行 所

都市又は府県名	姓並びに 氏名
---------	---------

新誌友紹介 下記の方が入会を希望していますので、見本誌をお送りください

住所	〒	-	
氏名		電話番号	- -

季音抄

山本鬼之介

足早に身を鎧ふかに黒日傘
水温を訊く異邦人梅雨の海
打水に江戸の風湧く佃島
橋よりはむかし色街夏柳
ハンカチの樹の下ハンカチーフに風
祝ひ日や鏡開きの夏夕べ
乾杯のサイダー風の通る椅子
衿ゆるく着て七夕の宵鏡
火の匂水のにほひの鶉飼かな
風鈴とグラスの水響き合ふ
オクターブあがる耳鳴り日の盛
限られし刻を乱舞の夏の蝶
「考える人」への応へ蟬時雨
ポンポンダリア根締め挿して華やぎぬ
師の句碑に半夏の雨の降るばかり
立葵祖母の教への矜恃かな
久久の富士の天辺雲の峰
夕立や万世橋のカフェ灯る

栢尾さく子
菊池ひろこ
五明昇
境延昭
椎野美代子
島津初花
内田恵子
井上燈女
鳥羽和風
森本早苗
松井由紀子
藤澤喜久
近藤徹平
大塚茂子
日高道を
青木鶴城
飛永鼓
野田静香

次の原稿を募ります。随時発行
所宛、ふるってお寄せください。
なお掲載については、編集部にお
任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月
を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起
きた面白い話題、めずらしい経験
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

六月の雨に爪弾くマンドリン
 でむしに会へば八十路も童歌
 六月の木々を映して寺の床
 初螢追うてひとりの弁天堂
 明滅はまさに螢の息づかひ
 消えて知る螢の闇の深きこと
 尺を取る女性テラー虹立ちぬ
 音頭取る鳶の頭や夏座敷
 六月の空へ投げたるブーケトス
 遠雷や遠くを見よと父の声
 蝙蝠や無声映画の如く飛び
 嫋やかに茅の輪を潜る異国びと
 川の面に羽衣めくや夏の雲
 灯籠の影に寄り添ふ苔の花
 竹林に響く尺八半夏雨
 かたはらの静かな鼓動螢籠
 南風呼ぶフラの指先腰の振り
 草に寝て草を旅する蝸牛

篠崎紀子
 清水桂子
 新井孝磨
 梅澤輝翠
 菅原真理
 西幅公子
 反町修
 染谷正信
 渋谷さいち
 横山君夫
 新 曆文
 丸屋詠子
 山岸久美子
 村杉清吉
 千坂平通
 元田亮一
 越田栄子
 本橋稀香

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	山本鬼之介	茂境 木和子 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木 鶴城 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10F)	椎野美代子	境延 昭 石井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早苗

水 明

令和四年九月一日発行 毎月一日発行

(第九十五卷 第九号)

定価 一〇〇〇円